おかしな世界で

樹羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おかしな世界で

【Ｎコード】
Ｎ１０５１Ｙ

【作者名】
樹羅

【あらすじ】
何年も昔に友人に借りて読んだ。程度の知識しか持っていない、剣道少女がハンターハンターの世界で生き抜くお話。
初っ端から死にかけるとか、何そのムリゲー。
変態ピエロことヒソカ贔屓で進んでいきます。

その一（前書き）

ちなみに、作者は剣道についてはまったくの無知です！
もしよろしければ、間違いが見つかり次第ご指摘お願いいたします。

その一

…なんで、なんでこんな事に。

頭の中で必死に叫ぶが、それに答えてくれる者は居ない。
その代わりに目の前のごっつい男三人組が喚く。
ただし、余程頭の悪そうな事を言っているのか、私の頭はまともにその言葉を理解することは無かった。
だが、それでも、男達がどういう目的で私に迫ってきているのかは分かって。
レイプとか、強盗とか、そんな物騒な単語が瞬時に頭を巡る。
ああきっと、凶器は男の持つナイフなんだろう。分かったからといって、どうしようもないんだけど。

取り敢えずどうしようかと考えて、まず抵抗をしないって選択肢は無しにしよう、と自分の心に誓った。
それによってどれだけ苦しむ結果になろうとも、今の段階で諦めるのは私を大切に育ててくれた両親への裏切りだ。
大体、諦めるぐらいなら、なぜ私は今まで剣道を習ってきたのかって話。
別に護身のために習ってたわけじゃないけどさ。

とにかく男に対抗するために、私は背中に担がれた竹刀袋から竹刀を取り出す。
私が抵抗しようとしているのが分かったのか、男達が目に見えて面白そうにしているのが分かった。
女子高校生の些細な、最後の力を振り絞った抵抗だと感じているのだろう。

確かに、私もこの場に居る全員を戦闘不能にできるとは思っていない。
しかし一人ぐらいなら…、そしてその隙を突いて逃げることだって出来るはずだ。
スッと竹刀を構える。
必ず成功する、と言い聞かせるように口の中で呟いた。

「クク…、大人しくしてれば痛い目遭わずに済んだのになぁっ！！」
嘘つけ。呟いて右足を踏み込んだ。
幸いなことにも男達が三人で一斉にかかってくることはなく、私はいつも通りを心がけて目の前の男だけに集中する。
ほんの一瞬の出来事だ。周りに気を散らすわけには行かない。

「ッ！？」

相手の手元を強く打ち込み、ナイフを地面へと叩き落す。
予想外の行動にか、男が驚いて私の顔をじっと見た。
…相手の、防具はない。しかしそれは私だって同じだし、相手の獲物は竹刀どころか刃物だ。
手加減をしている暇はない。
いつもの様に一本を取ったからと言って引き下がらず、そのまま足を踏み込んで。

「…てっ、テメェッ！！！」

「待てコラァ！！」

いっその事、気絶してしまえ。と、男の首筋に思い切り竹刀を叩き込んだ。
そして男が崩れ落ちたのを確認して、直ぐ様に踵を返す。
何でもいい、あいつらが追って来れないような隙間に…！

「ぅ、あ、」

パァンと乾いた音が何回か続いた後、私の右ふとももに大きな衝撃が走る。
そのまま足が動かなくなって、重たい学生鞄や防具袋と一緒に地面に倒れ込んだ。
靴下に染み渡った真っ赤な血は、直ぐにアスファルトへと広がっていく。

「いた、い…痛……うぐぅっ！？」

「手間かけさせやがってよ…」

「ククク、可哀想になあ。こんな所に来なきゃ今頃、パパやママと一緒におまんまでも食えてただろうに」

銃痕を靴で踏みつけられる。
気絶しそうな程の痛みに私が呻くと、一人はイライラとした様子で、もう一人は至極楽し気な様子でそう言った。
それでも諦めたく…、いや、生きたまま酷い目に会うのだけは避けたくて。
なんとか必死に腕で地面を這い、逃げようと試みる。

「動くんじゃねえよっ、オラァ！」

「カハッ…！」

案の定、一人の男が苛立ちを隠すこと無く、私の腹を思い切り蹴り飛ばした。

口から何か液体のような物が飛び出すが、もう私の頭はそんな物の正体に時間を割くことなく。

ただ、早く殺して、と。母が私の死体を見て、必要以上に傷つくことが無い様に。

「…はあ、はあ…はっ、ふ、」

息が荒い、視界が霞む、もう少し、もう少し。

なのに、目の前の男二人は今更言い合いを繰り広げていて、男の持つ拳銃は地面に向けられたまま。

何でもいい、早く。今度は男の銃を奪おうと、重たい腕を持ち上げた瞬間。

「おまっ、こんなガキのどこg　　あ゛？」

顔面にぴちゃりと生暖かい液体が降り掛かってきた。

そして、直後に私の体の上に降ってくる、まあるい…ボールのような物。

何が起きたのか分からなくて、思わずコテと首を傾げた。

もう一人の男は、怯えた様子で道の先を見つめて、逃げなきゃと必

死に震える足を動かそうとしていた。
でもそれは叶わなかったみたいで、二つ目のボールがアスファルトに転がった後…。
私の、体に、男の

「ぁ、あぅ、あ……。うぷっ、ヴエ゛ェ゛」

あまりの恐怖を感じると、人って生き物は悲鳴を出すことも出来なくなるらしい。
ただそれでも恐怖の隅っこには確かな嫌悪が存在して、私は声も上げれないくせに、体の上の死体だけは何とか地面へ突き落とした。
ジワリと制服に染み渡っていく血液が気持ち悪い。
生々しい感触と、おびただしい程の血の鉄臭い臭いに吐いた。

「大丈夫…じゃなさそうだねぇ」

当たり前だろボケ。吐いてスッキリしたのか、声の主を睨みつけながら、割りとハッキリとした頭で私は思った。
コツコツと辺りに足音を響かせながらやって来る人物。
暗闇の中で正確に姿を把握することはできないが、体格や声から男だろうと判断する。
…そして、その言い草からこの二人…いや、三人を殺したのはこいつなのだろうと。

「クク、念の乱れる気配がしたと思いきや。そうか…君か」

どことなく色気のある声を発しながら、だんだんと距離を狭めてく

る人物。
もう一メートルという所まで来たところで、そいつは足元の死体を邪魔に思ったのか、平然とした様子で蹴り飛ばした。
どいつもこいつも、何でこうも簡単に人間を蹴ることができるのだろうか。

「…んで」

「ん？」

「な、で、助け…ゲホッ、う」

「…僕は青い果実が好きでね。将来、大きく実った時の事を思うとゾクゾクするんだ…」

変態だ。
恍惚とした笑みを浮かべるそいつを見て真っ先に思ったが、口に出すことは無かった。

「とは言っても、まだ君は実ってもいない感じだけど…。まあ、合格だ」

「……」

「僕の名前はヒソカ。君の名前はまた会った時に、楽しみに取って置くことにしよう」

会うも何も、もうすぐ死ぬんだよ私は。

遠ざかって行く後ろ姿を見ながらそんなことを思い、私の意識は薄

れてゆくのだった。

その一（後書き）

書きたいのが複数できちゃったので、自重せずに始めることにしました。
ほんと申し訳ないです。
でも、完結はできるだけ…したい…な。

その二

パチリ。目を覚ます。
すると視界いっぱいには、見たこともないような真っ白な天井が広がっていて…。
…ああ、そういえばこう言う時には、確かお決まりのセリフがあったはずだ。
私はこまごまとしたことを考える前に、真っ先に思いついたことを口に出した。

「知らない天井だ…」

「そうだね。隔離塔の部屋の天井なんて物を、君みたいな子が知っていたら僕は困るよ」

「っ！？」

ハッとして声が発された方向に顔を向けると、そこには今まさに部屋に入ってきたところらしい、白衣を着た男が立っていた。
髪の毛は綺麗なプラチナブロンドで、顔にはシルバーのフレームの高そうなメガネ。
手元にはカルテらしき物があり…、顔はどこぞの外国の王子様のようなイケメンだ。
しかし、恋愛対象というよりは、絵画にして飾っておきたい様な美しさだな、と私は思った。

「隔離、棟？」

「事情があって、一般患者とは一緒にできない患者が入院する棟さ。まあ君の場合は連れてきた人物が人物だったからね。気にしなくて良い」

「それってヒソカ…」

「おや、知っていたのかい」

妙な人殺し（でも恩人らしい）が言っていた言葉を思い出す。やたらと分かりにくい単語を使っていたが、要は私はあの三人組に比べれば将来有望だ、ってことだったのだろう。だから、助けた。きっとただの気まぐれで。

「確かに、君をここに連れてきたのはヒソカだよ。彼は僕を贔屓にしてくれる顧客の一人でね、しっかりと代金も頂戴したから安心するといい」

「顧客？　医者なのに？」

「世の中そう単純じゃない。普通の医者は患者が拳銃による傷なんて負っていたら、警察やマフィアに通報するものなのさ。よっぽど治安の悪い場所じゃない限りね。後は分かるだろう？」

「……」

闇医者、って奴なのだろうか。綺麗な顔して金さえ頂ければどんなクズの怪我でも見るのかと思うと、少し軽蔑してしまった。

命を助けられた分際で、言えることでもないのだが。

「じゃあ、本題に入ろう。まずは名前を伺っていいかな」

「あー…分かりました、けど。私の荷物は見ていないんですか？」

「何、ただの確認だよ」

カルテらしきファイルを開いた男は、それを目で追いかけながら私に尋ねる。

しかし、てっきり私物は全部確認されているものだと思っていたので、その男の質問に私は疑問を覚えてしまった。

確認…って言われても、私がわざわざ答える必要はあるのだろうか。とは言え、これこそ無理に追求することでもなかったので、取り敢えず納得したことにして答えた。

「…佐渡島千聖（さどしまちさと）です」

「サドシマ？　珍しい名前だね」

「それは苗字」

「ああ、チサトか」

納得したように頷く男だが、当の私はいよいよ疑問で頭が破裂しそうだ。

話している言語は日本語なのに、名前は何故か英語圏の方式。

大体…昨夜の三人組はナイフと拳銃を所持していた。サイレンサーもついていなかったし、余裕で現行犯逮捕。

ヒソカに至っては殺人罪、医者の発言に出てきた単語には「マフィ

ア」

おかしいってレベルじゃない、けど怖くてそれを聞くことは出来なかった。
私が何も聞けないでいる内にどんどん質疑応答は進んでいく。
年齢とか性別とか（見りゃ分かるだろ！）、出身とか親の名前とか。
それでもポツポツと「何で聞かれないんだろう」という所があって、
ますます私は頭を抱えたくなった。
なんで性別は聞くのに、在学している高校とかは聞かれないんだ！
そして、男がカルテを閉じて、漸く長い取り調べが終わったかと思った時。

「では、最後の質問だ」

「まだあるんですか…」

「ふふ、これで最後だから安心してくれ」

優しく微笑む男を見て、私は不思議とその微笑みにやすらぎを覚えてしまう。
けど、その理由は実はこの取り調べてよく分かっていた。
この男の放つ言葉、「安心」とか「大丈夫」とか、人をホッとさせてくれる様な物が多いのだ。
多分こいつが医者だからに違いない。

しかし私までもがこの魔法の言葉に騙されては駄目だ。
心の中でブンブンと頭を振って、覚えてしまったやすらぎを男に突き返すつもりで冷静さを取り戻した。
そして、男の言う最後の質問とやらを待つ。

「君は…何者だい？」

「……は？」

思わず聞き返した。何ですかその中二病感溢れる質問は。

「ああ、勘違いしないでくれ。これは別に抽象的な質問ではない。実は、悪いが手術の最中に摂取した血をＤＮＡ鑑定に出させてもらったんだが。その結果…君は公式には存在しない人間だと言うことが判明したんだ」

「…存在って、現にここに居ますけど」

「そうだね、だから僕は君は何者なんだと尋ねた。…話を少し変えようか。君は国際人民データ機構という物を知っているかな？」

「知りませんね」

「ふむ、そうか。国際人民データ機構というのは、ありとあらゆる人間のデータが集まる場所さ、文字通りね。生体データには登録義務があるし、捨て子にだって国民番号はつく。…それが、君にはない。生まれたばかりの赤ん坊ならともかく、もう生まれて十六年になる君がだよ。おかしいと思わないかい？　僕はこの事実に気がついた時には驚いたよ。飲んでいたコーヒーをディスプレイにぶちまけたほどさ。だってつまり君ｈ

「おかしいのはあなたでしょう！！！」

男の声だけが淡々と流れていた個室に、突如私の怒鳴り声とテーブ

ルを殴りつける音が響き渡った。
男は驚きで目を見開いているし、開けっ放しの窓から私の声はだだ漏れになっているだろう。
しかし、もう我慢ならなかった。自分の存在を否定されて、これ以上我慢なるものか。

「生体データがなんですって？　私はそんな物聞いたことも見たことも登録した覚えもありませんよ。そんな物で調べただけで、あなたに私の人生を、今までの思い出を否定される筋合いはない！　存在しない？　じゃあ何ですか、私の両親は友人は全部幻だったとでも言うんですか？　私が今までしてきた勉強は！　必死で頑張ってきた剣道は！　……私からしてみれば、おかしいのはあなたの方です。データに登録されてない、それだけで皆が皆、私のことをおかしいと言うのなら。おかしいのは私じゃなくて、この世界だ！！
……痛っ」

興奮しすぎた所為か、ズキリと内蔵が痛んだ。
ああ、馬鹿だ私。初対面相手にやってしまった。
痛みで冷静になった頭で、自分が喋ったことを反復し、どれだけの事を言ってのけたのかを理解する。
…しかし、撤回するつもりなんて毛頭ない。この男だってそれだけの事を言ったのだ。
私は尚も男を睨みつけた。

「…は、ハハ、くふ…アハハハハハハハ！！！」

と、突如また響き渡った笑い声。
男の腹を抱えるほどの大きな笑い声は、もちろん先ほどと同様に外に居る人間まで聞こえていることだろう。
そんな事を考えながら、私はポカンとしたアホ面を晒してしまった。

…いや、えっと、なんだこいつ。

「ふっ…く…ああー、実に面白い意見だったよ。そうか、この”世界”がおかしいか。考えたこともなかったな」

「…言っておきますけど、私は真剣です」

「重々承知しているさ。冗談でも言えることじゃないものな」

てめぇ馬鹿にしてんのか。と口を開きかけた所で、突然男がまたファイルを開いた。

そしてボールペンを手に取り、スラスラと文字を書き始めたので、私はそれを邪魔することが出来なくなる。

仕方なく待って居ると、顔を上げた男が今度はこちらに向けて腕を差し出してきて、

「遅くなってしまったが自己紹介をしよう。僕の名前はノエル＝オリオールだ」

「あ、はい、改めまして佐渡島千聖です」

反射的に男…いや、ノエルの手を握り返してしまった。

うう、日本人の性…。って、いや、握手って外国の文化だっけ。

「ふむ、チサト…。じゃあチサト＝オリオールになるんだね。んー、まあそこまで変ではないかな」

「…えっ？」

「えっ、って。１６歳の可憐な少女が、血筋でもない男の家に住ん

でたら変だろう？」

「いや、えっ、す、住む？」

「チサト、君は実に面白い。僕は君に言われて初めて”世界がおかしい”という可能性に触れることが出来た。医者とは言え、僕も研究者の端くれだ。君がここでどの様な人生を送るのか、気になってしまったのさ」

「あー…でも、そのナンタラデータ機構って、」

「ん？　データの改ざんがしたいということかな？　結論から言うと無理だよ。そんなことをしたら僕の首は」

一拍置いて、ノエルは自分の右手で首を切り落とす仕草をした。
この場合…病院をクビ…な訳はないな。
でもそれなら。という私の疑問が伝わったのだろう。ノエルはニッコリと笑って言った。

「じゃあどうするかと言うと、ハンター証を取るんだ」

「ハンター証…」

「一言で言うと身分証明証。国民番号がなくても、試験にさえ受かれば取ることのできる、とっても便利な物さ」

「…私、運動は得意ですけど、頭は平均値行くか行かないかぐらいですよ」

「アハハ！　じゃあ安心だな！」

「は？」

というか、ちょっと待って。なんかハンターって単語で何か思い出せそうだから。

そんなモヤモヤとした気分を味わいながら、それでもノエルの話を中断させること無く、私はなんとか話を整理しようと躍起になっていた。

うーん…、だから私、そんなに勉強得意じゃないんだけど。

運動が得意な方が有利な試験って何。

「とにかく、その辺りはチサトの父である僕がやっておくから大丈夫だよ。君は安心して養生すると良い」

「はあ…分かりました」

「こらチサト。親に敬語とはどういうことだい？　後、僕のことは今後パパと呼びなさい」

「……」

なんなのよ、ホントもう…。

その三

「あああああ！！！」

「どっ、どうかしましたかチサトさん！？」

「…あ、いえ、何でもないです。ごめんなさい」

「……院内ではお静かに」

「すみませんでした…」

ノエルの娘になってしまった日の夕方。
足の怪我だけならともかく、腹部を蹴られたことによって想定以上のダメージを負ってしまった私は、少なくとも一週間以上は絶対安静の身になってしまった。
その為、歩きまわるなんてこともできず、することもなく延々とベッドの上で過ごしていたのだ。
まだ数時間なのにこれだ。果たして私は正常な神経を保ったまま無事に退院できるのだろうか。
そんなことを考えながら、ふとノエルが置いていった雑誌を手に取った時のこと。
パッと目に入る見出しには謎の文字。よくよく見ると全部そのわけのわからない文字で埋め尽くされている。
というか、日本語が一文字も見当たらない。

どういうこと！？　と驚く前に、私はこの文字を見て一つの重大な出来事を思い出そうとしていた。
そして、それを思い出してしまった瞬間に叫んだのが、冒頭の物である。
看護婦さんに迷惑をかけてしまい、ちょっと申し訳なかったが、今はそれどころではないのだ。
だって、いや、ほんと何で今まで気が付かなかったのだろうか。
そういえばヒソカも言っていたではないか。「念が乱れる気配がどうのこうの」と…！

「…でも、ハンターハンターって最後に読んだのいつだっけ」

むしろ、今までに一度しか読んだことがない気がするのだが、気のせいだろうか。
確か最初に読んだのは友人に借りた時のはずだけど…。
その時は多分、マフィアと盗賊が争って、やたらと大量の人が死んでた話まで読んだ気がする。
でも、それ以上のことは思い出せない。

「って、いや待てよ」

…もしかして、私今、念使えてるんじゃね？

「……」

ま、まさかね。

まさかまさかと思いつつ、どこか隅っこでは期待している自分が居

て（ヒソカが紛らわしい事を言うからいけない）。
私はキョロキョロと、何か念を確認できそうなものを探した。
念＝オーラ的な何かだと言うのは分かるが、未熟で知識も無い私はそれを感じ取れないだろうと判断してのことだ。
確か…主人公達が水の入ったコップに手を当てて、修行の成果を見るシーンがあったはず。
細かいことは分からずとも、念が流れているかどうかは分かるだろう。

「あった、水…。えっと、確か…？」

サイドテーブルからコップを手に取り、それを両手で包み込むように持つ。
…念は、何だっけ。大体の戦闘漫画にありがちなオーラ的な解釈でいいはずだ。
だとしたら、もういっその事イメージするだけで何とかなる。多分！
我ながらなんと適当な考えなのだろう。
そう思いながらそれでも必死にイメージし続けて、五分ほど経った頃だった。

「あ、」

じわり、と。確かに、今確かに水かさが増した！

「…私、地味にすごいことしてる？」

ノエルが驚いた表情で慌ててやって来たのは、それからすぐの事だった。
曰く、こんな危険な場所で念の修行なんてしてはいけない。と。
病院なのに危険って一体どういう事なのだ。
そう思って首を傾げれば、ノエルは「闇医者である僕がこの棟の専門医である理由は何でだと思う？」と、物分りの悪い子供に言い聞かせる様に言って。
その言葉の通りに考えてみた私は、すぐさま顔を青ざめさせた。
「念が使えるというだけで襲ってくる可能性は低いが、それでも危険な事に巻き込まれる可能性は高いんだ。ヒソカの様に変態的趣味を持った人間がやって来たらどうするつもりだったんだ」
「…ごめん。念の事とかあんまりわかんなくて」
「ってそうだよ！　何で念の事なんか知っているんだい、チサト！」
「ち、近い。ノエル近い」
家族という扱いになった途端、やたらと過剰なスキンシップを取ってくるのはやめてくれないだろうか。
そんなことを思いながら、私は押し返す様にノエルの顔の前に両手を突き出す。
一応距離は取ってくれたが、ノエルがそれについて謝ることはなかった。
「うーん…知っている物は仕方がない。君のことだから僕には分からない事情があるのだろう」

「…うん、ごめん」

「謝らなくていい。僕はそれを了解した上で君の面倒を見ることにしたんだ。…で、本題に入るが、チサトは念についてどれだけ知っているのかな」

「んー…、なんか、こう。ごく一部の人しか使えない、オーラ…生命エネルギー…？」

「随分とアバウトだね…」

「あはは」

もしハンターハンターの事を詳しく知っていたら、私はその情報を有益に使うことが出来たのだろうか。

そう一瞬だけ考えたが…、すぐに私には無理なことだと考えなおした。

きっと、下手に情報を持っている分、情報に踊らされて酷い目にあうに違いない。

安易に想像できる辺りが、何とも悲しかった。

「まあ、どの道ハンター試験は念を覚えない限りは無理だと思っていたんだ。何せ、毎年百万人以上の人間が受けるにも関わらず、合格者が一人も出ない年だってあるような試験だ」

「…念が出来たからって、受かるのかな」

「確実…とは言えないね。でも念の基本さえ押さえておけば、まず死ぬことはなくなるだろう」

”死ぬ”という言葉に、少しだけ体が反応してしまう。
しかし、既に拾われた命なのだから、冷静に考えてみれば死なんてもうどうでも良い事だ。
ただ真剣に考えてくれているノエルのために。…ああ、あと、一応恩人であるヒソカも、まあ。
とにかく期待を裏切らない様にしよう。
そう決心して私はじっとノエルの瞳を見つめた。

「私、何でもするよ。ノエルのこと信じてるから」

「…ふふ、それはそんなに簡単に口にする言葉ではないよ」

「口にしたほうが良いのよ。男に二言はないって言うし、前言撤回しにくいでしょ」

「男？」

「今だけ気持ちは男」

「困ったな…僕は性同一性障害には詳しくないんだが」

「ちょ、めんどくさく考えないでよ」

「アハハッ、冗談さ」

そんな揚げ足取りみたいな冗談交えなくて良いのに。
ちょっと不機嫌になってそっぽを向くと、ノエルが「ゴメンゴメン」と小さく笑いながら謝ってきた。
きっとノエルも私のこと面倒な子供とか思ってるんだろうな。でも

私だって同じ気持ちだ。

「えーと、じゃあ改めて今後の話をしようか」

「ん、さっさと進めて」

「はは…。取り敢えず、病院に居る間は勉強、それから燃える方の燃をしよう」

「燃える方の…？」

「そう。それも明日からの勉強でね。で、退院したら僕の家で本格的な修行だ」

「…うん、分かった」

やっぱり、念を覚えるのには基礎だけでも相当な時間がかかるんだろうな。

でもノエル曰く、試験を合格するには基礎だけで十分みたいだし。

身分証明がなくて心配なのは病院くらいだから、ノエルが居れば安心だろう。

…そう、ノエルが居れば。

ノエルが居なくなってしまったら、私に居場所はない。

「頑張るよ私」

一人ぼっちだけは、嫌だから。

その四

そして時は経ち、ハンター試験の日…。

って早い！　お願いだから私の努力をなかった事にしないで！！

…という訳で、ハンター試験の日改め、いよいよ試験が差し迫った日のこと。
改めてもまだ展開が早いのは、最早仕方のないことである。
なにせ、私が必死で修行してきた二年間をいっきに濃縮しようと言うのだ。
無理があるとは思うが、真面目に全部それを紹介しようと思ったら、余裕で十話以上かかるのでほんと勘弁していただきたい。

結論から言おう。私は一応、念の基本的な四大行は使えるようになった。
それに四大行以外の一部の技も多少は使える。
しかしノエルからの言い付けで、発の開発は今は考えないようにしているのだ。
水見式によって私の系統が強化系だと判明した今、私の頭には様々な必殺技のアイディアが詰まっている。
でも、ノエルがそう言うのだからしょうがない。もうノエルの言うことならなんでも聞いちゃいそうな私怖い。

「あー…しっかし…変化系だる…」

指先にオーラを集中させ、そのオーラの形状を変化させる修行。
そういえば漫画でそんなことをやっているシーンがあったような…。
程度の認識だったが、これが中々キツイ。
だってスピードを保って走り、障害物をひょいひょいと避けながら、
0から9までの数字を数秒以内でパッと作れって。
できるかーっ！　と投げ出したい所だったが、ノエルが「チサトは
変化系よりの強化系だね」と言ったので、諦めずにがんばってみる
ことにした。
念の修業はバランス良くやらないと、能力の真価を発揮することが
出来ないのだそうだ。
要は、いつかカッコいい必殺技を作りたいのであれば、それ相応の
修行をすること。

…まあ、今で漸く綺麗な形の数字を作れるようになった所なんだけ
どね。

「おっしゃー！　マラソン終わりっ！」

「はいお疲れ様。お風呂沸いてるから入っておいで」

「はーい」

玄関から家へとなだれ込み、そのまま荷物を放り出し風呂場へと直
行。
ああこれぞ一仕事終えてから我が家に帰ってきた時の、正しい休息
の取り方である。

部活をしているとよく分かる、家に家事をしてくれる人が居るこの有難み…。
ノエルの場合は仕事が忙しいから、早朝ぐらいしか相手にしてくれないのが悲しいけど。

「ふいー…二年かあ」

湯煎に浸かると自然に漏れるため息。まったく、本当に幸せだ。
しかし、そんな幸せな時でも頭によぎるのはハンター試験や修行のこと。
もう二年もこちらで生活しているのだから、別に身分証明証なんていらない気もするのだが…。
いつまでもノエルに甘えているわけには行かないので、やはりハンター証は必要なのだろう。

ハンター証を取るためだけに、修行し続けてもう二年だ。
元々、剣道をやっているから修行を始めたからといって劇的な変化はなかったし。
それを二年続けたからといって、何かが変化した様な気もあまりしない。
むしろ殆ど変わっていないような気がするのは気のせいか。
それとも、これが念の修行が原因なのかは、よく分からない。

「…私、強くなってるのかな」

ああ、試験合格できるのかさえ、心配になってきた。

「まーた言ってるのかい君は。僕から見ても十分強くなったって言

っているだろう？」

「んー、でも、比較対象が居ないし…。あ、このサラダのドレッシングおいしい」

「そう！　職場の同僚が薦めてくれた商品なんだよ！　…ってそうじゃなくて」

そうじゃない、とか言っている割にドレッシングについて語りたい様子なのは、私の気のせいだろうか。
なんて思いつつシャキシャキとした新鮮なサラダを頬張る。
相変わらず、一人暮らし歴うん十年のノエルの料理は抜群においしい。
実はこうしてのほほんとご飯を食べるだけで、心配事なんて忘れてしまえるのは内緒だ。

「とにかく、僕が自信を持って試験に送り出せるほどになったんだから、自信を持ちなさい」

「ふぁうい」

「返事はちゃんと」

「…んぐ。はーい！　頑張りますっ」

「うむ、よろしい」

ニコリと微笑むノエルに釣られて、私もニコニコ笑顔で応対。
やっぱり私としてはハンター試験に行くぐらいなら、もうずっとこのまま生活していたいんだけどなあ…。

…まあ、言わないけど、そんなこと。
ちょっとだけ色々な事が嫌になって、それを誤魔化すようにクロワッサンをかじった。

「では、修行も一段落したことだし、ハンター試験の話をしようか。チサトは今回の試験会場について知っているかな」

「ザバン地区ザバン市、だよね。この情報だけで会場探せって…ザバン市って広いんでしょ？　憂鬱」

「ふふ、でもこれも試験の一環なんだよ。百万人近い受験者の中、会場に辿りつけるのは一握りの者だけなのさ」

「そりゃそうだけど…」

このヨークシンの一角にあるノエルの家から出発して、そこから何日もかけてザバン地区まで行き。
なんとか試験会場を探し当てて、それからさらに長い長いハンター試験…。

…女って、ほんっと面倒なのよ。
たった数日の外泊でもスキンケアを怠ると肌が大変なことになっちゃうし、それ以外にも様々な面倒事が待ち受けている。
最悪…、ほら、あの…月に一度のアレにぶち当たることだってあるのよ！
これも念でどうにかなれば良いのになあ…。

「大丈夫。チサトは僕が認めた受験者なんだからね」

「ノエルに認められたからって、無条件で試験に受かるわけじゃな

いし」

「…ザバン地区ザバン市のツバシ町２－５－１０。めしどころ”ごはん”でステーキ定食を注文し、焼き方を弱火でじっくりに指定」

「……え？」

突然、意味の分からないことを言い始めたノエル。
いや意味の分からないことじゃない。今彼が言ったことは確か。

「これが試験会場へ行くためのカギだよ。ハンター試験、第２８７期のね」

「な、なんでノエルが」

「言ったろう？　チサトは僕が認めた受験者なんだよ。心配する必要はない」

そのノエルの言葉を聞いて、私はハッとした。
試験会場の情報を持っているのはもちろん、試験に関わる人物だけなのだ。
ではなぜ、ノエルが試験会場の情報も持っているのか、と言うと。

「…ノエルのお得意様ってもしかして、マフィアとかだけじゃなくて、」

「うふふふふふ」

ハンター協会とまで繋がってんのかこいつ…！

綺麗な笑顔を保ったまま、のんびりとコーヒーの入ったマグカップを傾けるノエルを見て。
彼は少なくとも今のところは、事情を話す気がないのだ、ということを察した私だった。

その五

めしどころ、ごはん。
確かに、そう書かれた看板を見つける事は出来たのだが、そのあまりの普通の定食屋っぷりに、ちょっと私は疑わしく思ってしまった。

「マジでここなの…？」

隣のどでかいビルならともかく、本当に普通の定食屋だぞここ！
…しかし、ノエルから受け取った情報が嘘だとも思えない。
と言うよりは、ノエルが嘘をついたなんて思いたくない。
二年間、何だかんだ言って私を自立させるために真剣に付き合ってくれた彼が嘘をつくなんて。

「…ま、入れば分かるか」

こんな事でごちゃごちゃ悩んでいたら、ハンター試験が終わった頃には心労で死んでしまいそうだ。
違ったら違ったで、このままとんぼ返りしてノエルに蹴り入れれば済む話だし。
とにかく入ってみよう、と私は店の暖簾をくぐった。

未だに慣れない文字だらけだが、それでもやはり普通の定食屋にしか見えない店内。
軽く見渡してみると、どうやらステーキ定食自体がメニューには存在しない様だ。
そりゃ、世の中探せば「弱火でじっくり」って言っちゃう人ぐらい居るよなあ。

「すみません、注文いいですか？」

「はいっ！…どうぞー！」

どうも店主は立て込んでいるようだったので、入り口に近い場所に居た若いお姉さんに声をかけた。
するとお姉さん、伝票をポケットから取り出して気前よく返事。
伝票いらないんだけど…ま、いいか。

「ステーキ定食を一つ。で、焼き方は弱火でじっくりでお願いします」

「…！　では奥のｈ　「そうそう！　弱火でじっくりだよ！」

お姉さんが奥の部屋に案内してくれる、かと思いきや。突然、子供の声がそれを遮った。
もちろん邪魔なんてされていい気はしない私。
しかし相手が同じ受験生、それも子供となると驚きの方が勝った。
バッと咄嗟に相手の顔を確認する。
どうやら、入店した時から店主と話していた人物のようだ。

「あー、良かった。あんた良い所に来てくれたよ、こんなんで失格とか冗談じゃねー」

「…私は別にいいけどさ、他人の注文を盗み聞きって大丈夫なの？」

「同じ受験生から情報を奪うのも有効な手段だぜ」

「偶然じゃん…」

とかなんとか言いつつ、しっかりと相手の観察をすることは忘れない。
「運も実力の内！」と調子よく笑う少年は、見たところ十代…前半といった所だろうか。
相手を騙すために念で若く見せている、という可能性もあるが、笑顔や言動は普通に歳相応だ。
この世界じゃ普通なのかは分からないが、子供らしいサラサラの猫っ毛の銀髪がとても綺麗で…。
…ノエルといい、何か不公平だ。そう思ってしまった。

「なっ、おっちゃん。良いだろ？」

「ええ構いません。奥の部屋へどうぞ」

「ご案内しまーす」

まあ、辿りつけてる時点で予選は通過って扱いなのかな。
それに身内から答えを聞いている私が言えたことじゃないし。
なぜだか一括りにされてるのは気に食わないが、どうせ試験中まで深く関わることもないだろう。

「ね、あんた名前は？　何でハンター試験なんて受けてんの？　つーかその背中の棒なに」

「…人に名前を尋ねる時は、自分から名乗るもんじゃないの」

「ああ、そっかそうだよな。俺はキルア。で、あんたは？」

奥の部屋…と言うか、エレベーターに乗り込んだ途端にこれだ。
ステーキをバクバクと食べ始めたキルアは、不躾にも私を質問攻めにしてきた。
いや、本当に一体どういう躾をされてきたわけ。親の顔が見てみたい！　まったく。
……しかしキルアって、なんか聞き覚えがある気がするけど、なんだっけ？

「私はチサト、チサト＝オリオール。受験の理由はハンター証が欲しいから、背中の棒は秘密」

「オリオール？」

「うん、どうかした？」

「いや…なんかどっかで聞いたような…。ま、いいや」

お互いにお互いの名前に聞き覚えがあるって…。変なの。
でもそんな事、考えたってしょうがないので、気にしないようにして私もステーキを頬張った。
あ、おいしい。けど私、あんまりレアな肉って好きじゃないのよねえ。

チン

と思ったらもう着いたようだ。
地下百階…相当深くまで来たらしい。

受験生が詰め込めて尚且つ盛大なバトルが繰り広げられる空間だから、多分災害時のための地下シェルターかな。
そんな事を考えながら、ちょっと勿体無いがステーキを置いてエレベーターから降りた。

…と、同時に広がる地下世界。

「うっ…」

思わず顔をしかめた私は悪くない。
それにキルアだって同じような反応だし！

地下というだけあってジメッとした空気なのはもちろん。
それだけではなく、受験者の熱気や殺気などが入り交じってとんでもない悪臭…。
いや、オーラを放ってしまっているのだ。決して念の生命オーラのことではないけど。

「はい、番号札をつけてください」

「え、…あ！　は、はい！」

こんな受験者たちに囲まれて、果たして試験を無事終えることが出来るのだろうか…。
そう思ってしまうのも、致し方のないことだと思う。
しかし、こんな中にも救いはあるものだ。
突然かけられた声にビクッとして横を向くと、そこには豆…ま、豆！？
えっと、とにかく豆っぽい何か。背の低くて豆っぽい人間が居た。
なんだこれ。かわいいけど。

「チサト、お前１００番かよ」
既にキルアは番号札を受け取っていたようだ。
確実に（笑）が付いているであろうその声にふと目線を下げると、受け取ろうとした番号札には１００の文字が。
「げ、えっと替えてもらうわけには…」
「ダメです」
「…そうですか」
き、切りが良いと縁起も良い！　そうに違いない！
落ち込む私を見て肩を震わせているキルアは、見なかったことにした。

見なかったことにした、とか言いつつ笑われっぱなしが嫌だった私は、その後すぐにキルアから離れた。
「もういい！　人の不幸を笑うような奴とは一緒に居られないね！」と。
さすがに本気で言ったわけじゃないから、そこは勘違いしないでほしい。
…というかむしろ。ただでさえ女ってだけで目立つのに、キルアと

一緒に居たら目立つこと目立つこと！
完全に悪目立ちだ。実際、キルアから離れて直ぐに「リア充爆発しろ」って声聞こえたし。
私としては、キルアなんかこちらから願い下げだし、仮にタイプでもそれじゃショタコンだ。
小さな男の子に手を出して犯罪者になった挙句、痴女扱いとかほんと勘弁して欲しい。

で、今は試験会場の端っこ。
とにかく隅に行きたかったから、わざわざ絶までして目立たないようにして、静かに人目のないところまで逃げた。
そして携帯を取り出し、暇つぶしでもしようかと思ったのだが…。

「…馬鹿か私」

当然のごとく圏外。なにを分かり切ったことをしているのだ私は。

「はぁ…、だから嫌だったのに…」

「僕は君の成長が見れて嬉しいんだけどなあ」

「いやー成長っていうか、この環境が生理的に受付な　うおぉあ！？」

「色気がみじんも感じられないね」

悪かったか！　生まれてこの方「キャァッ」なんて悲鳴上げたことねえよ…って違う！
一体誰だ、わざわざ気配まで殺して私の背後に回った奴は！

と、敵意むき出しで体ごと顔を後ろに向けたのだが…。
相手の正体を知った途端、私は手に持っていた携帯を取りこぼす程に驚愕してしまった。

「ぴ、ピエ、え、いや、ちょっ！？」

「ひどいなあ。そんなにびっくりしなくても良いんじゃないかい」

「だっ…！　……すみません、取り乱しました」

「別にかまわないけどね」

…この場所だって、別に煌々と明るいわけではない。
しかし、あの時に比べればまだ随分とましな方だ。
そう、あの時、ヒソカに命を助けられた時に比べれば。

ピエロの様な妙なメイクに、水色という派手な色をした髪の毛。
その上、それを掻き上げてワックスで固め…。
トドメに趣味の悪い服…っ！！
分かっては居たけど、私の命の恩人ってこんな変人なの！？

「久しぶりだね。元気そうで何よりだ」

言ってることは普通なのに、その変態的な雰囲気の所為でさっぱり普通には見えない。
周りの珍妙なものでも見るような視線も相まって、私はあまりその声に答えたくはなかった。

…でも、私は知っているのだ。こいつが躊躇いもなく人を殺してしまうような男であることを。

「ええ、お陰様で。その節は本当にお世話になりました。感謝してもしきれない程なんですが、お礼を言える機会が無くって…」

「お礼…ね。僕は君と戦えればそれでまんｚ　「それだけは勘弁して下さい！」

土下座でもなんでもしよう！　しかし、それだけは本当に！
だって、ヒソカと戦うということは、助けられた命を捨てることと違いないのだ。
どうせあの時助けたのだってただの気まぐれだろう。
今、戦いなんかしたらノエルに申し訳が立たなくなってしまう。

と私は本当に必死で頭を下げたのだが（土下座まではしなかったが）。
当の本人はそこまで本気というわけでも無かったらしく…。

「ククク…、そこまでしなくても、まだ君と殺り合うつもりは無いよ。まだまだ…美味しく実るまではね…」

「あ、アハ、アハハハハハ」

ノエルぅぅぅぅぅ！　助けてぇぇぇぇぇぇぇ！！！

その六

「おいガキ、汚ねーぞ！　そりゃ反則じゃねーかオイ！！」

そんな、地下全体に響き渡るような大きな声が突然聞こえてきて、私は思わずその声のする方向へと顔を向けた。
しかし足だけは淡々と動かしたまま、という…。でも正直、森の中を何時間も全力疾走させられるより全然ましだ。
…だからといって、あんな風に談笑しながら走ることもしないけどね。
大声で怒鳴った挙句、こんな状況で自己紹介。他の受験生に目を付けられるに決まっているのに。

「キルアまで居るし…」

こっちまで来ないよね、あいつ。もうちょっと離れよう。

さて、いよいよハンター試験が始まってしまったわけだが…。
…初っ端から、マラソンってひどいよね。
汗の臭いと呼吸音と視界への攻撃で、私は既に脱落しそうだよ。…こんなので脱落してられないけどさあ。

しかし、まだ一次試験ということもあり、試験の内容自体はまだまだ単調で簡単な物だ。
念を身につけている私にとっては、「つまらない」とまで言ってし

まいたくなるような内容。
ペース配分についても気にする必要は無さそうなので、かなり適当に走り続けて居たら…。
気づいたら一番前の集団の所まで来てしまっていた。
一応、途中から地下道ではなく、地上へと続く階段になっているのだが…。
いくら基礎だけとはいえ、念能力者は平らな道が階段になったぐらいで疲弊はしない。
なーんて事、考えながら走ってたら。
「あ、チサト！　お前、いつの間に」
背後から見知った少年の声。いや、顔を見ずともキルアの声だっていうのは分かるんだけど。
くそ、これ以上目立ちたくないってのに、なんでこんな時に来るかな！
「知りませんー。試験中にギャーギャーうるさい知り合いなんて居ませんー」
わざとらしく言って、キルア達の気配が無い方へと顔を向ける。
するとそれが癇に障ったらしいキルアは、私の隣へと並んできて。
「はぁあ！？　ヒソカとはなｓ　むぐぐぅう！！」
「？　ヒソカ？」
「おほほほ！　何でもないのよ僕、気にしないで！」

さすがに知ってたか。しかしそれを、わざわざ後から来た受験生に言いふらしてもらっては困る。
私は咄嗟にキルアの口を右手で塞ぐと、顔を動かせないようにすぐに左手で後頭部も押さえた。
当然、鼻までは塞いでないけど…。だからと言ってこの状況でも階段を走り続けるって、器用だな。

「キルア君。私の言いたいこと、分かるよね？」

軽く、本当に軽くだが、精孔が開かない程度の微量なオーラをキルアに流し込みながら、彼の耳元で私はささやいた。
オーラを当てられるというのは、一般人にとっては冗談じゃなく本当に辛い事なのだ。
ノエルから「チサトが念に目覚めたのは、その三人組とやらに攻撃されたときだろう。ヒソカ曰くその内の一人が念能力者だったそうだよ」、と聞いて良く死ななかったもんだな私、と自分自身に感心してしまった程なのだから。
…ま、でもほら、キルアって明らかに一般人じゃないし！
こんなに走り続けてても、足音がまったくしないとか異常だわー。

でも、そんなキルアでもやはり、オーラを流し込まれるのはきつかった様だ。
コクコクと冷や汗を流しながら頷く彼は、明らかな恐怖を私に向けてきていた。
ちょっと申し訳なくなってしまったけど…。どうせこいつにはこれぐらいしないと、効果なさそうだし。
開き直って満面の笑みを作った私は、「ありがとうキルア」とお礼を言いながら拘束を解いた。我ながらひどい。

…ゴン君。と、言うそうだ、彼は。

……確か、主人公の名前がそんなのだった気がするなあ。
ついでに主人公の友達についても、思い出してきたなあ…！

というか、彼が語った「ハンター試験を受ける理由」がモロに主人公のそれだったのだ。
ハンターだったらしい父親みたいになりたくて、とかどこの少年漫画の主人公だ！
まあここ、少年漫画の世界なんですけどねー！！

「…はぁ」

「何、ため息なんか吐いてんだよ。もう地上みたいだぜ」

キルアがそんな事を言って上の方を見上げる。
すると確かにそこからは外の明かりらしき物が差し込んできて、後続の人間にもそれが見えたのだろう。
誰かが「見ろ、出口だ！！」と嬉しそうに叫んだ。
…しかし、その時点で外の景色を見ることが出来た私は、その希望を打ち砕くようなことを思ってしまう。
だって、地上に出たのは良いけど、景色が明らかに二次試験会場じゃないんだもん。
湿原…なのかな。すごくジメジメとした空気だ。

「ヌメーレ湿原、通称”詐欺師の塒”。二次試験会場へはここを通

って行かねばなりません」

ああ、やっぱり。試験官の言葉を聞いて、私はその程度の感想しか抱かなかった。

しかし汗だくで、やっとの思いで地下道を走り抜けた面々は違うのだろう。

背後で誰かの落胆の声が漏れるのが分かった。

「死にますよ」そんな試験官の忠告が聞こえた後、地下道の出口のシャッターが下りてしまった。

シャッターの手前で死にかけている人のその絶望の表情と言ったら…。

あ、ヒソカが興奮してる。ピリッと肌を刺激したオーラにそんなことを察した私。

どうやらキルアもなんとなくだが分かってしまったようだ。顔をしかめて受験生達を睨めつけている。

あーあ、また走るのか。

念のおかげで汗ひとつかいていない私だが、それでもまだ一次試験が続くことによる落胆は拭えない。

それにヒソカが興奮しているという事実までが加わって…。

…なんだったかなあ、ここでいっぱい人が死んだような気がするんだよなあ。

モヤモヤとした物が胸の内に溜まっていく。思い出せないって不快だ。

「嘘だ！　そいつは嘘をついている！！」

と、そんな風に私が不機嫌になっている時にこれだよ。

いつの間にかどこかから現れた、傷だらけの人間がそんな事を叫んだ。
左手に何かを持っている事が分かり、それを確認しようと私は目を凝らす。
念のため凝も行なっているのだが…。明らかに、弱い。

「俺が本当の試験官だ！」

傷だらけの男の主張によると。今まで私がついてきた試験官は、この湿原に住む人面猿とやらが化けた姿なんだそうだ。
それを聞いていっきにざわつく受験生達。
私は思わず「さっきの話聞いてなかったのかよ」と、…いやさすがに言わないけどね。
内心ではそうやってあきれ果ててしまった。野生の猿とプロハンターを比べんな、っての。

「…しかし」

グロい。

何を今更、とお思いだろうが、忘れないで欲しい。私は元々はどこにでも居る普通の女子高校生なのだ！
そりゃ運動をやっている以上、時には大怪我をして痛い目にあうこともある。
しかし、今私の目の前に広がっている光景は、そんなのは目じゃないほどにグロテスクなのだ。
男の顔面に刺さるトランプ自体は別に驚きじゃない。さっきから凝をしている私には、トランプがオーラを帯びていることが分かって

いるから。
それを受け止めた試験官には素直に賞賛を送りたいが…。
え？　私？
私だったら多分、何枚かかすった挙句、避けるので精一杯じゃないかなあ。
所詮、私の実力なんてそんな物だ。だってハンター試験に念能力者が居ることを想定して、修行してたわけじゃないんだもの。
たったの二年間の修行。言うなれば付け焼刃だ。
だからキルアやゴンみたいに、念なんてまったく知らないのに、才能に溢れてる人間を見ると、それを思い知らされるよね。

「生き延びれるのか…私…」

試験に合格したとしても、すぐにハンター証盗まれちゃったりして。
あはは、あはははは。

……はぁ。

その七

湿原を抜けている途中、ゴンが仲間の悲鳴を聞いて逆走して行ってしまった。
先頭集団から離れるというのが如何に危険な行為であるか。
よーく分かってはいるのだが、ゴンが漫画の主人公であると気づいてしまった私は、申し訳ないけどまったく心配なんて出来なかった。
だって、主人公だよ？
それだけで信頼に値するってのも、別におかしな事ではないはずだ。

「いいの？　せっかく友達になれたのに」

「…友達？」

「あれ、違ったの」

「…いや、うん。ま、いいんじゃね」

ゴンが踵を返しても、一瞬しか足を止めなかったキルア。
視線しか向かなかった私が言えることではないが、あんなに楽しげに話していたのに、随分と冷たい反応だ。
とは言え、既に記憶と憶測からキルアの正体や出生に気がついている私。
ちょっといたずら心が疼いて、分かっていながらキルアにゴンのことを尋ねてみた。
まだ別に、友達って感じじゃないのかな。

「つーか、そういうチサトこそ。意外と冷静なんだな」

「んー…もっと悲鳴上げたりすると思った？」

「いや、泣きわめいて腰抜かしそう」

…酷くない？　初めて死にかけた時でも、そんな事なかったのにさ。多分、キルアは今のあちこちから悲鳴が聞こえる状況はもちろん、さっきのヒソカの凶行についても言っているのだと思う。あの時、私は冷静どころか無反応だったからね。そんな事よりまだマラソンが続くのだと思うと、憂鬱で仕方がなかったから。あ、あとヒソカのオーラが嫌だった。その点、まだ不快そうにヒソカを眺めていたキルアの方が、人間味があったと言えるかもしれない。

「一応ちゃんと師匠からお墨付きもらってるからね。ただの普通の女ってことはないよ」

「ふーん…。なあ、チサトの師匠ってどんな人？　俺は親父とか兄貴にしごかれたからさ」

「私も父親が師匠だよ。兄は居ないけど」

「嘘、マジ？　…何か、ハンター証が必要な家業を営んでるとか」

「まさか！　個人的に欲しいだけよ」

ああ、父親が十代の娘に修行をつけるなんて、おかしいと思ったんだな。
それも修行をつけるだけならまだしも、ハンター試験にまで行かせちゃう親。
私の場合は家出だなんて一言も言っていないし、だとすればキルア

が私の家庭の事情を疑ってしまうのも納得だ。
…まあ、私は血も戸籍上も繋がってない家族だからね。
とは言え、誤解されたままではいくら何でも困るので、慌ててキルアの考えを否定した。
するとあからさまにホッと息を吐く彼。
せっかく普通の人間に出会えたのに、同じような業界の人間が居たらいやだ。ってところかな。

「みなさんお疲れ様です。無事、湿原を抜けました。ここビスカ森林公園が二次試験会場となります」

そんなこんなで雑談をしていたら、いつの間にか二次試験会場へとたどり着いていた。
やっぱり、話し相手が居るってだけでも楽だな。
そんなことを思いながら、トラベルバッグからペットボトルを取り出し、水分を補給する。
あ、トラベルバッグと言っても、ちょっと大きめで収納が多いバッグ程度の物だからね。
しっかし、他の受験生は持ち物とかなんにもないのかな…。水分補給とか、運動する人間なら心がけるべきことでしょ？

「まあどうでもいいけど…」

どうせ、私以外の女なんかほとんど居ないし。男のことなんて知らないし。
そんなことよりも二次試験だ。一次試験の試験官は特に何も言わず去ってしまったが、二次試験の試験官はまだ来ないのだろうか。
そう思って広場の中央に建つ建物を見ると、出入り口の上に「本日

正午、二次試験スタート」と書いてあることに気がついた。
さらにその上の時計を見ると、もう正午までは後数分と言った所。
…建物の中から獣の唸り声っぽいのが聞こえるけど、確か二次試験って料理だったよね？
マラソンや他の試験に比べれば、二次試験はかなり印象に残っているのだ。料理で間違いないはずなんだけど。

「うーん…」

「チサト！」

「んっ？」

私の名を呼ぶのは誰だ！　…て、こんな可愛らしい声をした人間はこの場には一人しか居ないんだけど。

「ゴン！　良かった、無事だったんだね」

「こいつ、ツレの香水の匂い辿ったって言うんだぜ！　ありえねーよな」

「そうかなー。多分キルアも出来るよ？」

「出来るかっ！」

感動の、とまでは行かないが、純粋に嬉しいと思うことは出来る再会。
まったく怪我をしていないところを見ると、ちゃんとヒソカからは”合格”を貰ったようだ。
でも、知ってる？　合格を貰ったらヒソカの気分次第では、すごく

大変らしいよ？
ゴンの無邪気な笑顔を見て、私はノエルのひどくウンザリとした感情のこもった言葉を思い出していた。
「治療や交渉の度に戦闘を求められてごらん。ひどい時は院内の備品を大量に破壊されるんだよ。僕はその度に、なぜ彼と付き合いを持っているのだろう、と思い悩むんだ」
ちなみに、ノエルの場合は青い果実というわけではなく、純粋にノエルが強いから一度戦ってみたい、と迫られているそうだ。
それを聞いた瞬間、思わず「男の尻を追いかけるヒソカ」という構図が頭に浮かんでしまったが…。
今度は「十歳前後の少年の尻を追いかけるヒソカ」になるわけだな。
胸熱…じゃなくて、真剣にブタ箱に放り込まれて頂きたい所である。

「あ、ほらもうすぐよ」

嗅覚について白熱した討論を繰り広げている二人には申し訳ないが、いい加減に静かになれという意味合いを込めて、そう言いながら時計を指さした。
とは言え、本当にもうすぐなのは確かで、正午まであと数十秒というところまで秒針が来ている。
そしてやたらと長く感じられた数十秒が経ち、ついに長針が真上へと到達したその時！
会場の大きな扉が左右に開かれた。…の、だが。

「うわぁ…」

誰にも聞こえないぐらいの小さな声で呟いた。
あー、ほら、私は頭の中に二次試験は料理っていうのがあったから。
ちょっとくらいは予想がついていたのだけど、まさかドアが開いた途端こんな凸凹コンビが現れるとは思っていなかった。

一人は露出の多い服に、スラっとした手足が美しい女性。
一人がけのソファーにリラックスした状態で座り、組まれた足がとってもセクシー。
もう一人はそんな女性の後ろに座っている、何メートルはあろうかという大男。
…が、大きいのは身長だけではなく、腹回りも含まれる。
ねえ、あなたウエスト何メートルですか。と尋ねてみたい、いや気を抜いたら口にしてしまいそう。

「どお？　お腹は大分すいてきた？」

「聞いての通り、もーペコペコだよ」

ああそうか、この獣の唸り声っぽい何かは腹の鳴る音だったわけか。
どんな体の構造をしているんだ、こいつ。

「そんなわけで、二次試験は料理よ！！　美食ハンターのあたし達二人を満足させる、食事を用意してちょうだい」

どっかの誰かが「料理！？」と驚愕の声を上げる。
何度も言うように、なんとなく覚えていた私には想定の範囲だったので、とても冷静にその後の説明を聞くことが出来た。
要約すると、二次試験は前半戦と後半戦の二つの試練を乗り越えれば合格。
試練の内容は両方共「指定の料理を作ること」。もちろん、材料は現地調達。
試験官が満腹になったら終わりなので、実質早い者勝ち。
という試験内容だそうだ。ふふふ、遂に修行中にノエルから教わった料理の腕を見せることが出来るようだな！

あー…でも。

「豚の丸焼きって…、下処理の仕方とか知らないわよ」

まさか毛皮ごと焼くわけじゃないよね？　それに内蔵とかどうやって取るの？

しかしその辺りは試験官からの指定は無し。

この様子だと、受験生はみんな豚を本当に丸ごと焼いてしまうに違いない。

「変なことはしないほうがいいかなー」

試験官だって、筋肉馬鹿が料理を知っているだなんて思ってないよね。

だったら…って、おっ？

「みーつっけた」

で、

試験、落ちました。

「そもそも、女は体温高いから寿司は握れない。って聞いたことある気がする…」

いや、本当かどうかは知らないんだけどね。
それにしてもひどい…。合格者がゼロってどういうことだろう。

「ふざけんじゃねェー！」

同じく不合格が不満な受験生（恐らく全員そうだが）が試験官に殴りかかる。
が、美人だがヒステリックの気があるらしい試験官に届く前に、大男の試験官に殴り飛ばされてしまった。
かなり高い位置にある窓ガラスを突き破って、外に向かって飛んでいく受験生。
しかしその受験生は多分、見た目より全然軽症だ。それに…。

「ブハラ、余計な真似しないでよ」

「だってさー、俺が手を出さなきゃ、メンチあいつを殺ってたろ？」

大男と美人改め、ブハラとメンチ。
二人がそう話す通り、メンチは明確な殺意をもって受験生を迎え撃とうとしていた。
特殊な形をした刃の長い包丁を四本もジャグリングし、怒り心頭な様子で怒鳴り散らす彼女に、さすがの受験生達も口を閉ざさずには居られなかった。
…あ、でも一人だけ様子がおかしいけどね。

まあ言わずとも分かっていただけるだろうが、その一人とはもちろんヒソカのことだ。
一次試験の時からそうだったが、ヒソカはずーっと楽しげに試験官へと殺気を飛ばしている。
たまに私にも変な視線が来る。怖いから気づかないふりしてるけど！
多分、メンチが最初からピリピリしているのもヒソカが原因だ。
おかげで私まで気づいたら不合格。
気持ち悪い魚を捌くのに手こずっている間に、試験官がぶち切れて冷静さを欠いてるとかどういうことなの。
なーんて、私もメンチと同じように、不機嫌に「ノエルに何て言おう」何て考えていた時だ。
ふと、耳に届く謎の駆動音。そしてその直後。
「それにしても、合格者ゼロはちと厳しすぎやせんか？」
スピーカーを通して地上まで届いてきた老人の声に、この場にいる全員の人間が上空を見上げる。
誰かが空に浮かぶ飛空船を見て、「ハンター協会のマークだ」と叫んだ。
…そういえば、私すごく馬鹿なことを考えてしまった気がする。
ゴンやその仲間はちゃんとハンター試験に合格してるじゃん…。途中で終わるわけないじゃん…。
「うーん…恐ろしい…」
遥か上空の飛空船から飛び降りてきたネテロ会長（推定八十歳以上）

は、そんなことを思わせない元気な様子でメンチの胸へと熱い視線を向けている。
いやはや、何とも恐ろしいエロジジイである。
念の…多分、堅か硬で防御しているんだろうというのは分かるけど、まだ堅もまともに出来ない私からしてみれば、本当にネテロ会長のポテンシャルは恐ろしく感じられた。
だって、この見たままの実力がすべてじゃないんでしょう？
絶対に想像を超越するほどに強いよね。なんたってハンター協会のトップだし。

まあ、何にせよ再審査が終わったら、一日目は終了よね。
あーっ！　早くシャワー浴びたい！！

その七（後書き）

ちなみに、チサトが出来る四大行以外の技は、

周（元の世界から持ってきた竹刀に思入があり、どうしても使いたかったので。ただし持続時間は短い）

凝（凝が反射的に出来ない能力者は能力者とは言えない！　というノエルの考えにより）

堅（ぶっちゃけ使い物にならない）

円（ぶっちゃけ使い物にならない、その二）

という構成になっています。

その八

「次の目的地へは、明日の朝八時到着予定です。こちらから連絡するまで、各自自由に時間をお使い下さい」

「ゴン！！　飛行ｓ　「すいません！　シャワールームってありますか！！」

「は、はい、出てすぐ左の突き当りにござ　「ありがとうございますっ」

あの場に居た誰しもが、「なんだあの女」と思ったことだろう！
しかし、そんなことは知ったこっちゃないね！

あーもー、デオドラントスプレーも持ってきたのに、一日中動いてたから自分の汗で体が臭いこと。
多分この調子だと二着持ってきた着替えはすぐに無くなるから、ちゃんと洗濯しないとね。
というわけで、ついでに発見した洗濯場で洗濯を開始し、人目が無いことを確認してバスタオルだけでシャワールームに直行。
見られてない見られてない。仕方ない仕方ない。

「うはーっ、極楽極楽」

いやあ、まさかマッサージチェアまであるとは思わなかった。
牛乳は飲むつもり満々だったけど（ビンはなかった）、ここまで至れり尽くせりだとはねえ…。
シャワーも浴びて、洗濯も済ませて、スキンケアもある程度済ませて、後は御飯食べて就寝するのみ！
なんてスキップ気味で廊下を歩いていたのだが…。

「う〝っ…」

な、何で廊下に死体なんかがあるのよ！
それも鋭利な刃物で惨殺された、バラバラ死体。出血多すぎ、臭い、鼻が曲がる。
気の立った受験生が乗る船だし、セキュリティはしっかりとしているはずだろう。
ってことは、まだ片付けられていない所を見ると、死にたてほやほやってことかな。
それにまだ周囲に飛び散った血も乾いていないし…。って、なんかこう言う所に気がつくって、探偵みたいじゃない。
ペロッ、これは青酸カリ！　バタッ！　なーんちゃって。

「…いや、なんちゃってじゃねーよ」

いくら何でも、死体に動じなさすぎじゃないか。
これはもしかして、私も変人の仲間入りということなのだろうか…。
そんな事を考えてちょっと落ち込んだ、ハンター試験一日目の夜のことだった。

＊ ＊ ＊

「ねぇ、今年は何人くらい残るかな？」

チサト曰くヒステリック気味の美人、メンチがそう口火を切った。
頬杖を突き、一旦食事を休憩しているらしい彼女の言葉に、その場にいる他の二人、ブハラとサトツも考える素振りを見せる。
こうして、試験官である三人がゆったりと食事をしているレストランは、受験生たちが休む空間と比べると、遥かに高級感のある空間に見えた。

「合格者ってこと？」

「そ、中々の粒揃いだと思うのよね。一度落としておいて、こういうのもなんだけどさ」

ふてぶてしく言ってのけた彼女は、もう受験生から恨みがましい視線を向けられたことなんて、忘れ去ってしまったようだ。
ブハラとサトツは、メンチのわがままの被害を受けてしまった人間達を可哀想に思った。
若くしてシングルハンターという称号を持つ彼女は、少々難のある性格についてもハンター界隈では有名なのだ。
が、もちろん本人はそんな事には気がついていない。

「ね、サトツさんどう？」

「ふむ、そうですね。ルーキーがいいですね、今年は」

「あ！　やっぱりー！？　あたしは２９４番がいいと思うのよねー。ハゲだけど」

さすがはメンチ、あれだけの啖呵を切っておきながら、あの哀れな（ただし自業自得）受験生を褒めるとは。
しかし普段なら呆れた様子を見せるだけの二人も、話題が尽きそうにもない今はメンチの振った話題に乗ってくる。

「私は断然９９番ですな。彼はいい」

一次試験の間、長いこと先頭集団の一員だったキルアは、サトツの目によく留まったのだろう。
無表情ながらにも少しだけ声のトーンを上げて言う彼だったが、メンチはやはり主観にてそれを切り捨てた。
キルアの性格が悪そうだなんて、そんな事は誰も聞いていない。

「ブハラは？」

次に、そう尋ねられた彼は、ルーキーではなく４４番。
チサト曰く変態…、いや、誰から見ても変態であるヒソカを上げた。
既に二桁にも上る死傷者を出しており、去年も試験官を負傷させて失格になっている彼が話題に上がるのは当然の事。
だが、もちろん話題になるのは”良い所”ではない。
ヒソカの事を話すメンチはあからさまに顔をしかめ、その後に同じくヒソカについて語ったサトツに至っては、彼を「異端児」とまで称した。
それだけ彼は、誰もが危険視する存在なのだ。

と、そんな男についての話題が盛り上がってくると、同時に浮上してくる存在があった。

「そういえば、１００番は４４番と何らかの関係を持っている様でしたね」

「えっ？　１００番が？」

「おや、ご存知ですか」

いくら試験官とは言え、番号だけを言われてパッと顔が浮かぶ受験生は少ない。
そんな中ですぐにチサトの顔を頭に浮かばせたメンチに、サトツは少なからず驚いたようだった。
表情の変化が乏しく、かなり分かりにくいが。

「確信は無いんだけどねー、あの子もスシの事知ってたみたいだったから」

「ああ、やっぱりそうだったんだ。それに念も使えるみたいだったよね」

「まだ少々経験が足りないようですが…。あの纏は正しい師事を受けなければ、出来る物ではないでしょう。それにしても…、不思議なのは彼女が４４番に対しお礼を述べていたことです」

「お礼って、まさか４４番が人助けをしたとでも？」

「それは分かりません。慈善ではなく、ビジネスという可能性もあります」

かと言って、ヒソカが自分よりも格下相手に、公平で全うなビジネ

スを持ちかける、というのも考えにくい話だ。
三人は、少し変わったきれい好きの少女を思い浮かべ、それを頭の中でヒソカの隣に並べてみる。
…そのあまりのミスマッチさに、何とも言えない空気がこの場に漂った。

「へぇっくし！　ズズ…、なんだろ。ちょっと薄着すぎたかな」

その八（後書き）

ちょっと短めですが、一気に投稿。

その九

カツカツカツ、と靴のつま先で床を叩く。

「ふむ」

納得したように一人頷いた私は、そこから数歩進んでまた同じように床を叩いた。
コツコツコツ。先ほどの音と違い、明らかに床の先に空洞があることが分かる。
まあ、変に疑わずとも、冷静になって考えればすぐに分かることだ。
恐ろしく高く大きな、それも窓なんか一つもない、不思議な円柱のタワー。
一体何の目的で、それもどうやって作ったんだこれ。
そんなことを考えてしまうようなタワーに降ろされた受験生達（私含む）に言い渡されたのは、三次試験の内容とルールだった。

「生きて下まで降りてくること。制限時間は七十二時間」

生きて、というのは当然として、一応制限時間が設けられている。
七十二時間内にこのトリックタワーとやらを降りなければならないのだ。
…ま、トリックって言っている時点で、罠と仕掛けだらけなのは明らかなんだけどね。
だから私は言ったのだ。変に疑わずとも、普通に冷静に考えればこの床に下へ続く道が隠されているのだと。

「あれ、誰もいない」

主人公であるゴン達は放って置こう、そうすぐに決めた私はそのまま見つけた隠し扉へと足を踏み込んだ。
すると思惑通り床が回転し、下り立った先には誰もいない狭い部屋が。
出口は…あるにはあったが閉じている。
そしてその閉じている扉には何か看板が取り付けられており、それを読もうと私は出口に近づいた。

「運命共同…の、道」

…それは、まさかつまり。

「ちょっ、嘘ぉ！　嫌なんだけど！」

あのむさっ苦しい野郎共とぴったりくっついて行動しろってかー！
冗談じゃない。今朝もシャワーを浴びた意味が無くなってしまうではないか。
文字を読んだ途端に不機嫌になった私は、反射的に右の拳にオーラを練り込んだ。
ルールは制限時間だけなのだから、いっそのこと壁を壊してしまえばいいだろう、と。
が、どうやら試験官はそれを察したらしく。

「やめておいた方がいい。これ以降の試練も二人でなくては挑戦できないようになっている。いくら何でも、全ての試練が壁を壊せば

済むとは限らないよ」

「……」

どこからか、スピーカーを通した声が私の耳に届いた。
つまり…一人で行けば、必ず詰むってことか。
ちくしょう、何て私は運が悪いんだ！　そう悪態を吐きつつも、素直に試験官に従ってオーラを押し込めた。
いくらなんでも、そんな自業自得な形で試験に落ちるわけには行かない。

かと言って簡単に割り切れるわけでもなく、私はそれからしばらくの間、苛立ちを隠すことなくもう一人の受験生を待っていた。
壁に背を預け、眉間に皺を寄せ、一応携帯も開いてみたが、やはり電波が立つことはない。
恐らく、この世界には辺境の地に足を運ぶ、ハンター専用の携帯もあるのだろう。
しかし残念なことに、私の携帯は極普通の一般人が持つものだった。
そんな携帯が、こんな飛行船で来なければならないような、どこでも知れない場所でまともに機能してくれるわけがない。

「はーっ」

苛立ちを込めた荒々しいため息を吐き、もういっそのこと上に戻ってしまおうかと思い始めた頃。
ふと、天井からガコッという物音がして。

「……」

「カタカタカタカタ」

／（＾ｏ＾）＼

ちょっ、え、なんで。なんで寄りによっとてこんな危険人物と！？
しかも運命共同だからって、わざわざ手首を鎖で繋がなくてもいいんじゃないのぉ！？

という私の悲鳴は、幸いなことにも心の中だけで留まってくれた。
こんな薄気味の悪い、それも念を使えるような人間に喧嘩を売りたくはない。
同じような景色が続く廊下を歩きながら、チラリと隣を歩く男を盗み見た。
褐色の肌…は別に問題ないけど、そんな肌のあちこちに針が突き刺さり、カタカタと謎の擬音を出し続ける妙な男。
憶測でしかないが、きっと顔面に刺さっている針は彼の武器なのだろう。
で、念を使用している以上はただ刺すだけの武器じゃないだろうから、なにかしらの能力が…。
うううう、近寄りたくないーっ！

「わっ、と」

突如放たれた数本の矢に、私はびっくりしたような声を上げて体を横にずらした。
ただのトラップだからそうスピードは無いし、狙いも正確とは言え

ないから避けるのは簡単。
しかし、それでも塔を降りる間ずっと同じような罠だらけだと、気が滅入ってくるものだ。
「はぁ…」と壁に刺さった矢を睨めつけ、自然とため息を吐いた。

「…君、キルとはどういう関係なの」

「ひっ、あ、ふぁい！？」

うおあああああ、いきなり肩叩かないでよおおおお！
びくっ、と飛び跳ねて反射的に半歩後ろに下がる、が臨戦耐性には入らない。
何故って怖くて戦う気にもならないし、”運命共同”ということはどちらかが死んだら二人とも失格だから。
…だからといって、まったくもって安心は出来ないんだけどね。

しかし相手は私が怯えていることなんてまったく気にしていない様子で、無表情のまま無抑揚の声で「聞いてるんだけど」とまた一言。
えーっと、少なくともヒソカみたいな変態ではないわけだな。
よし、とにかく答えなきゃ…って、「キル」って誰だ。

「き、キル？　って…」

「９９番。一緒に試験会場に入って来たんだよね」

「そうですけど、」

と言いながら相手の顔から視線を下ろし、ジッと胸元の番号札を見つめる。
３０１番なのになんでそんな事を知っているのだろう、と。

すると視線の意図に気がついたらしい男は言った。

「先に会場に着いた知り合いに聞いたんだよ」

「あ、そうですか」

こんなコミュニケーション苦手そうな人でも、知り合いって居るんだな…。

それにキルアともなんだか親しげだし。そうでもなきゃ、愛称で呼んだりしないよね。

…そういえば、キルアってお兄さんが居るんだっけ？　とは思い出したものの、その兄がどこで出てきたかはあまり記憶にない。

幻影旅団はちょっとだけ覚えてるんだけどなあ。

「えー…キルア君、とは…」

友達、ではないな。まだ出会って一日ちょっとだし、彼のことで知っている事といえば、名前ぐらいだ。

ゾルディックの事だって、私が勝手に知ってるだけだもんね。となると…。

「ゆきずりの関係って感じですかね。ほんと成り行きで自己紹介までしちゃっただけですし」

うわ、自分で言っといてなんだけど、冷たい反応！

これってキルアと親しい関係であろう人に言うべきことじゃないよね。

やってしまった、と頭を抱えたいぐらいの気持ちで針の人（仮）の顔をうかがった…んだけど。

…あ、うん、無反応すぎて怒ってるかどうかなんて分からないね！

ここは素直に謝ってフォローしておこう。

「す、すみません、別に無関心とかそんな事じゃなくて。ただ本当に彼と出会ったのが偶然だったので」

「別に怒ってないから。むしろ…友達とか、身の程知らずな事を言わなくて良かったね」

「え……あ、ちょっ！　歩きます、歩きますから引きずらないで！！」

身の程知らずとか失礼な事を言って、こちらの反応も見ずに勝手に歩き出した針の人（決定）。
わずか三十センチ程度しか鎖の長さが無いものだから、すぐに引きずられる形になってしまった。
いや、さすがに引っ張られた直後に歩き出したけどさ…。せめて「行くよ」とか一声かけてくれれば良くない？
どんだけコミュニケーション苦手なの？　むしろコミュニケーション能力皆無なの？
言わないけど、言わないけどね！
でも…こんな人と、降りるだけなのに制限時間が七十二時間もある、くっそ高い塔を降りたくないんですけどーっ！！

カシャッ。

「あっ」

重たそうな音をたてて扉が開いた先には、多くの扉が壁に沿って並んでいる広い円形の部屋。
恐らく頂上よりも少し広い程度の部屋を見て、もしかしてここがゴール？　と首を傾げた瞬間。
手元から何かが外れるような音がしたかと思うと、その直後にジャラジャラと地面に鎖が落ちて行く音。
すぐさま視線を下ろせば、思った通り手元から手錠が消えていた。

「１００番チサト、三次試験通過第二号！！　３０１番ギタラクル、三次試験通過第三号！！　所要時間　八時間三十二分！！」

「い…よっしゃーっ！！！」

あーっ！　まるで大きな大会で一試合終えたかのような達成感！！
ガッツポーズするのも無理は無い。無理はないともさー！
よーし、ゆっくりと休むぞー。三日近く暇なのは正直キツイけどね。
とテンション高く、部屋の中央目掛けて走りだしたのだが。

「やあ。待ちくたびれたよ」

正面から歩いてきた変態を視認した瞬間、自分でも驚くぐらいの反応速度でＵターン。
が、振り向いた先にも針の人…。慌てて方向転換し、今度は右方向の隅目掛けて全力疾走しようと足の裏に念を込めた。
が！　またもや眼の前に変態が！　なんで！？

「ひどいなぁ、せっかくだから話でもしようと声をかけたのに。お

互い暇だろう？」

「いっ、いえいえ！　私はちゃんと暇つぶし用の道具を所持しておりますので！」

「じゃあ僕もそれで暇を潰そうかな」

「やだなぁ、小説ですよ？　シリーズ物しか持ってないですし、並んで座って読むつもりですか？」

「僕はそれでもかまわｎ　「あははは っ！　ご冗談を」

ジリジリと後退りながらの攻防戦。
冗談じゃない勘弁してくれ。という空気をバンバン醸し出してるにも関わらず、ヒソカは食い下がってくる。
いや、分かってる。私が嫌がるから余計面白がっていじめてくるんだ。お前はいじめっ子か！

「わっ」

それでも諦める訳には行かなくて、なんとか離れようと後ろに下がり続けていると、何かが背中にぶつかる感触がした。
壁…ってことはない、そんなに無機質な感触じゃないし、まだそこまで下がってない。
じゃあ、つまり？　嫌な予感をビシビシと感じながら、後ろへ顔を向けると。

「ぎゃあっ…あ、あ？」

誰だお前。

振り向いた先には針の人…ではなく、謎の黒髪長髪美人が居た。
ぱっちりお目々で無表情の美人さん。どことなく見たことある顔…
だけど、少なくともこの場には居てはならない人間なのは確かだ。
だって、まだ三次試験を通過した受験生は私を含めて三人しか居ないのだから。
体を離すことも忘れてじっと美人さんの顔を見つめ、次に恐る恐る変態を確認。ニヤッて笑われたキモイ。
…で、私。針の人は…どこにも居ない。え？　ん？　ええ？？

「ま、まさか」

「うん、そう。さっきまでのは変装、これが本当の顔だからよろしく」

よろしくされたくないです。
という言葉は唾と一緒に飲み込んだ。変装とかねーよ、絶対なにかしらの念能力でしょ！？
針の人だと分かった途端、慌ててヒソカが居ない方向に飛び退いた。
「良い反応だ」とか言わないで怖い。
よく見れば…確かに美人さんの服と針の人が着ていた服は同じものだ。
それに抑揚が無い喋り方と、声も同じ。恐らく他の受験生は声を聞いていないから気づいてないのだろう。
…というか、見覚えあるのって、まさか。

「あの、もしかしてキルアのお兄さん…的な」

「…そうだけど、誰にも言わないでね。もし言ったら…

殺すから」

じゃあ何で私に本当の姿を見せたんですか。

心の底からそう思った。

その九（後書き）

この流れは最早定番ですね。

その十

いくら広いとは言え密室で、それも近距離にヒソカと針の人改めイルミが居るというこの状況。
衣擦れの音がするだけでも反射的に体が飛び跳ねる。それを面白がったヒソカがトランプに誘ってくる、イルミはそれを冷たく拒否する。
そんな恐ろしい空間の中でひたすらに耐え続けた私は、正直今までの試験の中で一番疲弊していた。
だからこそ、数時間経って漸く現れた三次試験通過第四号を見た瞬間、私は叫ばずには居られなかったのだ。

「おせーんだよチクショオオオオオ！！！」

「のわぁぁああっ！！？」

三次試験が終わり、三日振りの太陽を拝みながら説明されたのは四次試験についての事。
その時はもう開放感に浸るばっかりで、あまり試験官の話しの内容は頭に入って来なかった。
私のターゲットが８０番と分かっても、その番号に該当する受験生を探そうともしないだらけっぷり。
ってなわけで、もう既に四次試験会場に船で向かっている最中なの

だが、未だに私のターゲットが誰なのかは分かっていない。

「ふーん、じゃハンゾーのターゲットはあの三人兄弟なんだ。いいなー楽そー」

「楽ってなんだ。俺も経験は積んでるつもりだが、あの兄弟も結構場数踏んでると思うぜ」

「いやいや、格闘家と暗殺者を比べちゃダメだって」

「な、なんでだよ」

船内のラウンジにて、のんびりとコーヒーをすすりながら歓談する。容貌などから最初は変人の類かと思っていたが、話してみれば割りと常識人でまともだった彼の名は「ハンゾー」。

多分、服部半蔵が元ネタであろう彼は、服部半蔵と同じくジャポン（この世界での日本）出身の忍者だった。

だからなのか、ただ腹いせで蹴り飛ば…ゲフンゲフン。

…声をかけただけなのに、気づけばジャポンについての話で盛り上がっていて。

そんで試験が終わるのを待っている間、ちょこちょこハンゾーと話していたらいつの間にか三次試験終了。

で、船に乗ってから「名刺渡すの忘れてたぜ」と、手渡された名刺には…日本語（霧隠流上忍、半蔵ってモロじゃねえか）。

もう興奮して反射のレベルで日本語について問い詰めちゃうのも仕方ないよね。正直、小説だってこの世界の文字だと読みづらいし。

「大体、ハンゾーだってまともにやり合うつもりないでしょ？　どうせ三人がターゲットを狙っている隙に乗じるか、同じように三人がターゲットな人間に便乗するとか考えてるくせに」

「…そんなことを言う女には８０番についての情報はやらねえぞ」
「別にいいよ。その時はあんたのターゲットで妥協するから」
「よーし分かった、情報ならどんだけでもやるからやめてくれ！」
一般人相手って楽よね。ちょっとオーラを当ててやるだけでダウンするんだもん。
それにハンゾーは私がヒソカにちょっかい出されてる上、トリックタワーをギタラクル（イルミ）と下りてきたこと知ってるし。
だから本当にちょっと脅すだけで、勝手にペラペラと喋ってくれるのだ。
…あ、訂正、別に脅さなくても放っておけばその内話す。こいつ、女の私よりお喋りだから。
「８０番はチサトと同じ数少ない女の受験生だ。あの状況下でもちったぁ目に入ってるだろう」
ハンゾーの言う「あの状況下」というのは、トリックタワーの一階でのことだ。
いくら周りに人が増えようとも、ヒソカが今一番気にっているゴンが現れない限りは、私から興味が反れることはない。
そのため、結局タワーにいる間はずっとストレスがたまり続けるという本当に劣悪な状況だったのだ。
制限時間ギリギリにやってきたキルアとゴン曰く、その時の私はかなりヤバイ状態だったらしい。
どうヤバイのかは聞かなかったが、相手の表情や言葉から察するに目が死んでたんだと思う。

あー、で、私以外の女性の受験生ね。
確かにハンゾーの言う通り、女ってだけで他の受験生よりは目に留まりやすい。
だからと言って番号札までは覚えていないが…。三次試験が終わった時点で、女性は私を含めて三人しか居なかったはずだ。

「可愛い感じの子と、サングラスをかけたキレイな感じの人だよね。どっち？」

「サングラスの方だ。狙撃銃を所持している」

「狙撃手か…。こっちから仕掛ける分には問題なさそうね」

「ま、概ね同意だな、お前の場合そんなことよりサバイバルが一番心配だぜ。俺はちゃんと修行の一環で習ったが…どうせ火もろくに起こせないんだろ」

「失礼な、ちゃんと道具は揃えてきてますー。現代人は現代人らしく、文明の利器を有効活用すればいいのよ」

「いやいや、ハンターってのはそんな簡単なもんじゃないぜ。時には人類未開の地をたった一人で開拓することだってなあ」

「ご安心を、私は別にハンターになりたい訳じゃないから」

とは言っても、ハンゾーに私の素性を話すわけにもいかないので、私は「これよ、これ」とニンマリとした笑みを浮かべると、右手でお金のサインを作った。
実際、この試験を受験する者は皆が皆ハンターを志している訳ではない。

今この船に乗っている受験生だって、私が把握しているだけでもキルア・イルミ・ヒソカは人によっては不純と言える動機で受験しているし。
ハンターを志して受験している者でも、「ハンターになって〇〇がしたい」という目的を達するためにハンターになるのだ。
となると…私が受験する理由だって否定されるものではないよね。

…でも、なんかさ。

「みんな、自分の命よりも大切な事があるなんてすごいよね。私は死のリスクをほぼ回避出来るようになってから、受験することにしたし。危険だと思ったらすぐにリタイアするつもりで来てるのに」

「…十分お前も普通じゃないから気にするな」

「っ、そ、そんな話はしてないわよ！」

「ほー、否定はしねーんだな」

「ぐっ」

思わず声を荒げる、がこれでは自ら「私は自分のことを変人だと思っています」と流布している様な物だ。
いや、正確に言うと「私は変人扱いされるのが嫌いです」だけど。
どんな些細なことであれ、弱みを握られるというのは自分にとって悪影響でしかない。
弱点を突かれればもちろん戦いで負ける可能性が高まるし、ハンゾーみたいに…人のコンプレックスを刺激してくる奴だっている。
くそっ、ニヤニヤすんな。お前のその表情やたらと腹立つんだよ。

「…っのハゲめ！　そんなんだからモテないんだよ！」

「モテ…！？　それこそ今はそんな話じゃねーだろうが！」

「はぁあ！？　そっちから喧嘩売っといてなによ！！」

二人してテーブルに手を叩きつけて勢い良くイスから立ち上がる。
と、その勢いでコーヒーが机に飛び散り、カップと皿がカチャカチャと音を立てた。
まあもちろん、そんな音より怒鳴り声のほうがうるさいわけだが。
そしてこれもまた当然のことながら、いきなり喧嘩をおっぱじめた人間に自然と周囲からの視線が集まる。

「ハッ、売られた喧嘩を買う様な女こそモテねーだろっ」

「ッ…！」

「つうかよ。お前って女の割に口わりーし、いきなり人に飛び蹴りかまそうとしてくるし。女としての品性が欠如してるんだよな」

最早、売り言葉に買い言葉で収集がつかなくなるかと思われたが、そんな周囲の期待を裏切って、すぐに私は言葉を紡げなくなってしまった。
そして悔しそうに顔を歪めて黙り込んだ私を見て、優越感を覚えたのだろう。
急に饒舌になったハンゾーは、イスに座り直すと既に冷め切ったコーヒーに口をつけた。
…だが、私は決して言い負かされたわけではない。
まったくもってハンゾーの言うことは正しいと思うのだが、だからと言ってここで負けを認めるほど脆弱な精神は持ちあわせていない

のだ。
剣道とは言え、スポーツの人口が男より女のほうが多いという事はなく。
男だらけの熱苦しく厳しい環境の中で、セクハラにも物ともせず逆にセクハラしてやるような私がなあ…！
そんな女としての品性とか気にしてられると思ってんのか！

「うおっ、な……に…」

ガンッという激しい音をたてて私は右足の運動靴でテーブルを踏みつける。
終わったかと思われた喧嘩に興味を無くした周囲はもちろん、ハンゾーまでもが驚いて片膝立てた私を見上げた。
その視線の先には…禍々しいオーラを纏った満面の笑みの私。
背中に携えた竹刀袋からゆっくりと竹刀を取り出し、ゆらゆらと先端を揺らめかせながら右手だけで構えを取る。
そして、絶句したまま怯えるハンゾーの頭を竹刀で軽く叩いて狙いを定め、

「あんまり調子に乗ってると…」

「…あ、えっと、すっすみませっ」

「そのツルッピカの眩しい頭…」

「ほんと、調子乗ってごめんなさ」

「叩き割んぞオラアアアアアアッ！！！！」

「ギャアアアアア！！」

ちなみに、そのコントの様な追いかけっこ（本気ではない）は、ゴン達が慌てて止めに入るまで続けられた。

その十（後書き）

こんな主人公は果たして万人に受け入れられるのだろうか…。
とは思うんですが、最初からそのつもりで書いてましたすみません。

【セクハラと逆セクハラの一例】
同一人物によるスカート捲り四回目で遂にぶち切れたチサト。
無言で相手を床に押し倒したかと思うとズボンとパンツを脱がし、
さらに「土下座して四回分謝るまでは返さないから」と言い捨てる。
たとえ先生に叱られようとも絶対に下半身裸の状態で謝らせる鬼。

私は弟が居るので、両親からは「三回言っても聞かなかったら怒って良い」と躾けられてきました。
ので、チサトもそれに習ってます。だからと言ってこの復讐の仕方はどうかと思いますけど。

その十一

結論から言おう。四次試験は気味が悪いほどに簡単だった。

魚を取って食べたり、非常食で凌いだり、のんびりと今後の計画でも立ててみたり。

…って、いや違った。その前に番号札の事よね。

ハンゾーにも言ったけど、思った通りこちらから仕掛ける分にはまったく問題は無かった。

まず、ヒソカの後に島に入ったらすぐに適当なポイントに身を隠す。で、次に８０番が来たら後をつけて、相手が島の散策を終えて少し気を緩めた所で一気に攻撃！

最後に、番号札を取って残った８０番さん（仮）を、人目のつかない雨風の凌げる所に隠すだけの本当に簡単なお仕事でしたよ。

ヒソカやイルミ、はたまたキルアにゴンなんて天才ばかり相手にしていたから感覚が麻痺していたが。

念の基礎までは習得できている私は、受験生の中では中々の強さを誇っているらしい。

実際、四次試験中に一度だけ他の受験生に襲われたけど、軽くあしらってやるだけで特に怪我もせずに済んだし。

そうなると頭に浮かんでくるのは、先ほども言った「今後の計画」。

だって私はハンター証さえあれば普通に暮らすことができるのだ。

別にもう修行とかする必要なくね？　と。

だったらもう適当な所に居を構えて、…ああそうだ。ノエルの伝手でバイトとか紹介してもらえばいい。

しばらくバイトを続けたら私にも人脈とか出来るだろうし、そうしたらもう立派な自立、よね。

「んー、でも必殺技は欲しいしな…」

うーん、ジレンマ。

「しかし…もう最後かあ」

ぽつりと呟く。が、その呟きに答える者は居ない。
いや、私は今一人でシャワーを浴びているのだから、返答があっても困るのだが。

キュッとコックを捻ってお湯を止めると、個室の外にかけられたバスタオルを取って体の水滴を拭う。
この飛行船のシャワーを使う度に疑問に思うのだが、船内の水って一体どこに貯蔵されているのだろうか。
確かに大きい飛行船だとは思うけどねえ…、最初なんが何十人って人間が乗ってたじゃん。不思議。

「えー、これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は二階の第一応接室までおこし下さい」

「げっ、嘘」

まだ服も着ていないのに面談だと!?
恐らく飛行船全体に響き渡ったであろう放送を聞くと、私は思わず顔をしかめて声を上げた。
最初に４４番が呼ばれた所をみると、呼ばれるのは番号が若い順。
つまり私は四番目!
うわーっ、面談って言ってもそんなに時間かからないだろうし。間に合うかな。

「というか、タイミング悪すぎ」

しかしブツブツと言って居てもしょうがない。そんな暇があるなら早くしなきゃ。

体を拭うのもそこそこで終らせて、慌てて服を着る。洗濯物はもういい、後回し。

化粧水とかつけて、髪の毛も水分が落ちない程度に乾かして、服装を整えて。なーんて事をしていたらすぐだ。

「受験番号１００番の方。１００番の方おこし下さい」

「あああああ待ってええええ！」

「すっ、すみません遅くなりましたっ！」

「ほほほ、かまわんよ。まあ座りなされ」

「あ、はい、失礼します」

室内に入った途端に鼻孔をくすぐる、真新しいイグサの香り。それから掛け軸に座布団にちゃぶ台に梅の花に…。

ひ、久々の日本だ！　と、ちょっと感激してしまって、キョロキョロと辺りを見回しながら座布団の上に正座した。

これで緑茶があれば完璧なのにな。なんて思ってちゃぶ台に視線を落とすが、会長の声ですぐに思考は中断される。

「では三つほど質問をさせてもらおうかの。まず、なぜハンターになりたいのかな？」

「えー、そうですね。公的施設の利用料金が無料になる、などの特典を使用したいからです。また、知人に受験を勧められたからというのもあります」

「ふむ、なるほど」

いやー、我ながら不順な動機だ。でもキルアとかは何て答えるのかな、素直に「なんとなく」って言っちゃうんだろうか。

…言うんだろうな。

「では、おぬし以外の八人の中で、一番注目しているのは？」

「注目…ですか」

いまいちはっきりとしない質問の仕方だ。注目というと、期待に近い意味の様に聞こえるが…。

きっと会長はそう言う意味で言ってるんはなくて、単純に気になっている受験者は誰か、って聞いてるんだよね。

嫌でも目に留まる人間なら４４番で間違いないけど、注目なんて言葉には当てはめたくない。絶対に。

「２９４番です。趣味があったので」

だから、正確に言うと注目してるのはハンゾーじゃなくて、ジャポンのことかな。

ハンゾーの話を聞いていると、ジャポンは現代の日本に近いんじゃ

なくて、昔の日本に近いみたいなんだよね。
話を聞いた時は「なにその映画村」って言っちゃったけど…。ハンター証取ったら、必ず観光に行こうと思ってます。

「最後の質問じゃ。八人の中で今、一番戦いたくないのは？」

「んー…と……、あー、いや、普通に４４番です。はい」

なんか長考しちゃったけど、考えるまでもなくヒソカだったな。
しかし…「戦いたくない相手」を聞かれるだなんて。なんか嫌な予感。

嫌な予感、ってのはすべからく当たる物のようだ。
私はキルアが不機嫌にクレームをつけている様子を眺めながら、ぼんやりと現実逃避をする。
えーと、うん、トーナメント？　そっか、まあそれはいいよ。
……私の初戦、ヒソカ？

「落ち着いて素数を数えるんだ…！」

２３４５ってあ、４は素数じゃないや。
ちょっと素数は間違っちゃったけど、人間こんなしょうもないことでも冷静を取り戻すことはできるらしい。
一息ついて改めてトーナメント表に視線を向ければ、今度はちゃんとヒソカ以外の番号にも眼を向けることが出来た。

ヒソカに負けたら次はクラピカ…だったかな？　確かそんな名前の女の子みたいな青年が相手で。
その次は格闘技の達人みたいな雰囲気を持つ、結構年輩のおっちゃん。
その後もいくつかのチャンスがあり、私はヒソカを除いた計四回のいずれかで勝てばハンターになることが出来るのだ！
なんだ、最初がヒソカってだけで、よく考えてみれば私は結構恵まれているのではないか。
あのキルアだって、与えられたチャンスはたったの三回だしね。

「ふふ」

ちょっとにやけると、キルアからギッと鋭い視線と共に殺気が飛んできた。
おー怖い。八つ当たりはかっこ悪いぜ少年よ。

さて、まず第一試合はハンゾー対ゴンの組み合わせだ。
この辺りの漫画の記憶はまず無いけど、多分私の予想だとゴンが勝つかな。
ハンゾーって頭もそれなりに良いし、忍者らしく影で暗躍する技術も実力も持っている。
なのに驚くほどに運が悪くて、何かしらの事件に巻き込まれたり、自らポカをしてしまったりするのだ。
三次試験だって結局ターゲットの番号札は手に入らなかったらしいしね。
「ばっかじゃないの。ダサッ！」って言ったら武器投げられたけど、何もそこまで怒ること無いじゃない。ねえ？

「えぐい…」

思わずそう呟きたくなるほどの、目も当てられないような試合がしばらく続いた。
これじゃただの拷問だ、そう言ってしまいたくなるようなひどい試合。
…ゴンってさ、私、ただの主人公キャラだと思ってたんだよね。
でもこの試合を見たことによって、私のゴンに対する評価は改められてしまった。
あれは普通じゃない。意地とか、根性とか、そんな簡単な言葉で片付けられるものじゃない。

一言で言えば、ヒソカと同じ世界の人間。

「……嫌なことを考えてしまった」

お姉さんは彼の将来が心配です！

そして第二試合。恐ろしいことに、組み合わせは私対ヒソカ。
さっきの試合を見ていて分かったのは、ここに居る人達は「まいった」なんて言葉は簡単には口に出せないのだという事。
プライド…なんだろうか。あ、もちろん私にはそんな高尚な物は存在していない。
試合が始まった瞬間にまいったを宣言するつもりだ。

が、

「わざと負けたら殺す」

「……はい？」

「僕は今興奮しててねぇ…。君の行動次第じゃ何をするか分からないなあ」

「え、ま、マジで言って…」

「ああそうだ、ちゃんと背中の武器も使ってくれよ」

「うっ」

嘘だと言ってよバーニィ…！！！

その十二

なんか、周りからすっごい哀れみの目を向けられている気がする。
いや気がするんじゃなくて、確実に向けられてるんだな。

ジャッジの人とヒソカに
「ほんっとお願いします。三分、いや一分だけ待って下さい！」
と懸命に頭を下げて、なんとか一分の猶予を貰う。たった一分だが無いよりは全然マシだ。
ヒソカの言う通りに背中の袋から竹刀を取り出すと、ピンッと背筋を伸ばして構えを取った。
怯えてばかりでは何にもならないのだ。冷静に気を鎮めなければ。

「…始めっ！」

ちょうど一分経った瞬間に、ジャッジの掛け声が室内に響いた。
先手必勝、という訳には行かない。こちらからは飛び込まずにヒソカの動きを待っていると、焦れったく感じたのかトランプを飛ばしてきた。
…やっぱり、普通の練習用の竹刀なんかじゃ無理だな。
トランプ自体を叩き落すのは可能だが、何度もこの攻撃に耐えることは無理だろう。
仕方なく竹刀にオーラを纏わせると、第二陣のトランプを交わしながら前へ出た。

「はぁあっ！！」

気合の入った一撃、だがヒソカは容易にこれを避ける。
行き場の失った竹刀は急速に地面に向かって落ちていくが、しっかりと持ちなおすとその勢いで竹刀を横に薙いだ。
が、これも避けられる。やっぱりヒソカ相手には真正面からの攻撃は無意味の様だ。

「ククッ、まさかこの程度じゃないだろう？」

ヒソカがそんな挑発をしながら、右足で私の手元を目掛けて蹴り上げてくる。
くそっ、こちとらこの程度で精一杯なんだよ！
言い返したい所だったが、正直なところそんな余裕もない。
慌てて半歩ほど後ろに下がる、と見せかけて。

「おっ？」

突然スライディングをかましてきた私に、多少なりともヒソカは驚いた様だ。
その驚いき隙にヒソカの足元をくぐって背後に回る。
取り敢えず一撃！　一撃でも入れればヒソカだって満足するだろう！
私はあの少年達の様に天才ではないのだ。こうでもしなければ一撃さえも入れることは出来ないだろう。
そう、無謀にも武器を捨てることまでしなければ。

脇を締め、腰を捻り、足をしっかりと地面に突いて、全身をくまなく使って、体をバネの様にしなやかに！

撃つべし！！

え？　その後の結果？
もう散々でしたよ。そりゃ昔はみんなでプロレスごっことかボクシングごっことかしましたけど、所詮はごっこですもの。
竹刀を周を纏わせたまま遠くにぶん投げて、ホテルの壁に穴を開けるほどの大惨事にして。
そこまでして漸くヒソカの腹にグーパンチね。
ほとんど形にもなってない様なもんだけど、一応硬で殴ったからね。
ヒソカでも結構痛かったみたいよ。
その後はもうボロ雑巾の様になぶられて、途中で命からがら「まだ負けちゃダメですか…」って言ったら。

「ん？　ああ、僕が言うからいいよ。まいった」

だってさ。
あんだけ人のことを物の様に弄んでおいて。あんなにあっさりと「まいった」って…！

「納得いかない。納得できない！　うううぅ…」

「おーよしよし、がんばった。チサトはがんばったよ」

ぐす、ハンゾーって忍者のくせに優しいよね。

多分そこまで歳の差があるわけじゃないと思うんだけど、私の頭を撫でる手がどこかお父さんみたいな雰囲気を持っている。
なんだかノエルに会いたくなって、ますますしんみりとしてしまった。

…色々あった。私の試合の後の方がむしろイベント盛りだくさんだったと思う。
でもそれが全部吹っ飛んでしまうぐらいに、私は今とっても悔しいのだ！　ああ悔しい、悔しいとも。
たとえヒソカ相手でも「悔しい」という感情は芽生えてしまうのだ。
正直、私自身でもびっくりするような心情の変化だが、今回の出来事は私に修行を決心させる程には大きな物だった。
修行しよう。せめてヒソカに襲われて逃げることができるぐらいになるまでは修行しよう。

「ハンゾー、ジャポン観光は中止ね。私やっぱり師匠のとこで修行するから」

「そうだな。お互いにまた強くなったら、打ち上げでもしようぜ」

「おうよ！」

このハンター証に誓って！

えー、で、ハンター証ね。そう、ハンター証。
今はホテルのとある一室で、ハンター証についての説明を受けようとしていた所だったのだ。
まだ説明は始まっていないが、もちろんこの場にはヒソカだって居

る。
何十人でも余裕で入れるこの大きな室内にぽつん、と十人足らずの人間が居て。
その場のほとんどの人間は一言も喋らず、みんな重たい面持ちをして黙り込んでるだけっていうね。

「あれ？　私空気読めてなくない？」

「おせーよ」

怒られた。
ククッとヒソカが口元を押さえてさも面白そうに笑う。うぬぬ、苛立ちはするがまあ前に比べればマシな感じだ。
先ほどの試合を終えて、私は改めて彼が命の恩人であることを思い知ったのだ。
最初はもちろん、さっきだって彼にボロクソに負けたことで、逆に向上心を得ることが出来た。
結局、致命傷も受けてないし殺されだってしていない。

「……」

「どうした。突然、難しい顔なんかして」

「…いや、なんだろ。疲れてるのかな」

「そりゃ疲れてるに決まってんだろ。さっきヒソカとやり合ったばっかじゃねーか」

「うん…そうだよね」

ヒソカって意外と優しいんじゃないか？
一瞬でもそう思ってしまった私は、きっとこの長い試験で神経をすり減らしてしまっているのだろう。
それに結局、一回も湯船には浸かってないしね。帰ったら湯の花でも入れたお風呂にゆっくりと入ろう。
なんてことを考えている内に、気づけば説明会が始まっていた。
あ、しまった。途中まで聞いてなかった。ハッとして今まで机に向けていた視線を上げる。
マーメンさん（名前まで豆だ）から咎めるような視線を受けてしまった。あちゃー、口頭じゃなくてマニュアルとか無いのかな。

バンッ！！

「ぅおっ」

びくっと思わず肩を揺らして、バクバクと脈打つ心臓を押さえながら部屋の出入り口へと体を向けた。
もちろん、室内に居る人間がみんな揃ってそちらへと視線を向ける。
そこに居たのは…、恐らくキルアの事でひどく怒っているのであろう、ゴンだった。
ハンゾーに折られた腕は痛々しく、それでもしっかりと三角巾で固定されている。でもハンゾー曰く「すぐ治るように折ってある」だそうだ。
確かに、ヒビで済むくらいだったら潔く折ったほうが丈夫な骨になるって聞いたことあるな。

「キルアに謝れ」

仲間の呼びかけにさえ答えずに、ゴンは真っ先にイルミに向かってそう言った。

…ああ、さっきの表現は訂正。みんなが揃ってゴンを見たわけじゃない。イルミは今ここではじめてゴンに視線を向けたのだ。
あれ？　そういえば、結局なんでイルミは私に正体を明かしたんだろう。ヒソカが何か吹き込んだのだろうか。
……いや、まあ別にいいんだけど。

それにしてもゴン君ったら。
いくら怒っているからと言って、ほぼ初対面の相手の腕をいきなり握りつぶすってどうかと思うよ。
それこそハンゾーのきれいな折口とは違って、神経ごと粉々に砕いてしまうほどの勢いだ。
うーん、ほんとどうかと思うぞ。少年よ。

「ゴン。ちょっといい？」

「うん、何？」

ハンターについての説明も受けて、イルミからキルアの居場所も聞き出して。
色々と満足したであろう彼に声をかけると、私はバッグから予めメモしておいた物を取り出した。

「これ、私の連絡先。試験中もキルアのおかげで割りと楽しかったし、キルアに会えたら”また機会があったらよろしく”って伝えといてね」

「分かったよ。でも、チサトはククルーマウンテンには行かないの

？」

「ごめんね。私は家に帰って保護者にちゃんと報告しなきゃいけないから…。あ、そうそう」

ゴンの言葉でふと思いだした。
ノエルってどうもハンター界隈でも有名な医者らしいんだよね。
「もし、気に入った子が居たら渡しておくといい。三割引で診てあげるよ」と言われ、名刺を何枚か預かっていたのだ。
ゴソゴソとバッグの中を探り、不思議そうに首を傾げるゴンに「ちょっと待ってね」と言いながら名刺を探す。
…お、あった。

「保護者、というかまあ私のお父さんって結構有名な医者らしいの。あんた達って何仕出かすか分からないから、何かあったら三割引で診てあげるわよ」

「うー、俺ってそんな信用無い？」

「自分の腕を見てからもう一度言ってごらん」

「…ごめんなさい」

「あはは、ま、気をつけてね。じゃあえーっと、クラピカさんにレオリオさん？　お二人もまた機会があったらよろしくお願いしますね」

「ありがとう！　またね！」

ゴン達の連絡先を交換せずに別れを告げたことに、別に深い意味はない。
けどこれから起こることを考えると、正直な所そこまで親密な仲になりたいとは思えないのだ。
何が起こるかを事細かに知っている訳ではない。けど一つだけ言えるのは…、多くの人が死ぬ。それだけ。

「はー、私も大概だわ」

修行はやめて平和に過ごすとか、そんなこと出来るはずがないのに。
何を夢見ていたのだろうか。
きっと何だかんだで事件に巻き込まれて、すっごく面倒な事になって、そんで何度も死にかけるんだ。
…間接的には、またヒソカに助けられたことになるのかな。そう思うとちょっと憂鬱だ。
いやいやヒソカは関係ない！　私は私の意志で修行するのよ！

ブンブンと首を横に振って嫌な考えを吹き飛ばすと、私はズンズンとホテルの廊下を突き進んだ。
早く帰りたい。その一心で出口に向かって……ん？　待てよ。

「ここ、ホテルじゃん」

ピタッと唐突に足を止めたかと思うと、私は誰にでも無く呟いた。
そう、ホテルなんだよここ。結局ここでは一泊しか出来ていないし、ほとんど何も楽しめていないけれど。
このまま帰るのはいくらなんでも勿体無すぎるんじゃないか？

くるっと踵を返し、先ほどと同じように廊下を突き進む。
ノエルからクレジットカード預かってるし、試験に合格したご褒美として食事代ぐらいは奢ってもらってもいいだろう。
いや、そんな物よりも今の私はお風呂に飢えている。ゆっくりと温泉に浸かりたい。
とは言え私一人では泊まり方なんて分からないから、この際ハンター協会の人に無理矢理聞いて…！

「わっぷ、すみませ…」

「君は…」

「チサトじゃないか。なぜこんな所に？」

「すみません間違えましたごめんなさいさようならっ！！」

本当に何でお前らがここに居るんだよ！？
ぶつかったのがイルミだったのがまだ救いだけど、それにしてもこいつらがこんな人気の無い廊下にまだ居るだなんて。
がむしゃらに歩いていたことから、少し道がそれたりしているのは分かっていた。
だから今私がいる場所に、受験生たちが居てはいけないはずなのだ。
しかしここ数日で、いくら私でもヒソカやイルミに対する耐性はついた…と思う。
まあ、でももちろん逃げるんだけどね！

「待ちなよ。丁度良い所に来てくれた」

だーっ！　丁度良くないです！　お願いだから手を離して！！

「…大人しくしないと、殺すよ」

「すみませんでした勘弁して下さい」

やっぱり一瞬でもヒソカのことを”優しい”と思ってしまった、さっきの私は疲れきって居たのだろう。
ちょっとでも思い通りに行かないと、すぐに「殺す」とか言っちゃうような人間が優しいわけがないじゃないか！
とは言え相変わらず恐ろしいには変わりないので、私はそれ以上は抵抗することなく大人しくなってヒソカに問いかけた。

「あの、丁度いいって何がでしょうか」

「僕じゃなくてイルミだよ」

「え？　あ、はあ」

丁度いいって…要は私に何らかの用事があるってことだよね？
なんで世界一有名な殺し屋なんかが、私に用があるんだろうか。
不思議に思いながらも頷いて、私はヒソカからイルミへと視線を動かした。
…しかし、二人とも本当に背が高いな。こんなに見上げる人間ってあんまり居ないよ。

「さっきゴンに渡してた名刺、見せてくれる？」

「あー、父のですよね。はい」

ああ、もしかして私の言動でノエルのことが分かっちゃったのかな。
そういうことか、とすぐに納得して私はバッグからまた名刺を取り

出してイルミに渡した。
ヒソカは既に取引相手なんだからいらないよね…って、あれ？
「ゾルディックさんって、専属医の方とか居らっしゃいますよね。だったら別に医者の名刺なんか…」
「うん、だから、専属医」
「……え？」
私の問いかけに、相変わらず無表情なイルミは頷く。そんなイルミの手には…ノエルの名刺。
ノエルの名刺を持ちながら、「だから専属医」？
「え、あっ！」
唐突に思い出してしまった。
そういえば、キルアも最初オリオールという名前に聞き覚えがある、と言っていたじゃないか！
まさか、というか、え、ノエルって本当に何者なの！？
「はい、返すよ。その名刺はあんまり無闇矢鱈と配らないほうが良いよ。面倒なことになるからね。用事はこれだけ」
「…あ、はい。ご忠告ありがとうございます」
「帰ったらノエルを問い詰めてみなよ。きっと面白い話が聞けるから。じゃあね」
「はい、また」

……

……

……

「よし、取り敢えず温泉に行こう」

▼　チサトは　げんじつとうひを　くりだした！

その十二（後書き）

次から漸く発習得編です。

その十三

まず家の直ぐ側まで来ると、美味しそうなご飯の香りが鼻をくすぐる。

「おかえり。良くがんばったね、チサト」

で、ワクワクしながら玄関を開けると、そんな風に優しくノエルが出迎えてくれて。

靴を脱いで部屋に上がると、テーブルの上には色とりどりの料理が並んでいて。

ただそれだけで良かったのに。なのに、何で…！

「何で極東の島国で狼に囲まれなきゃいけないのよおぉお！！」

事の起こりはそう、ホテルの温泉でゆっくりして（なんと温泉はハンター証提示でタダだった）ちょっとお高いランチを食べて。

さあ帰ろうとハンター証で飛行船のチケットを取ろうとした時の事。

♪～　♪～

「ん？　あ、そっか、電波届いてるんだ」

すっかり忘れていたよ、携帯のことなんて。クレジットカードを使

う前にせめて連絡入れればよかったかな。
なんて思いつつ、いつもの着信メロディーが鳴る携帯を手に取る。
ディスプレイにはやはり「ノエル」の三文字が輝いていた。

「もしもし？」

「ちょっとチサト、ひどいじゃないか！　なぜ連絡してくれなかったんだい？」

「あはは、ごめんごめん。なんか最終試験の会場が委員会が運営するホテルだったんだよね。で、ついつい寛いじゃった」

「まったくひどいなあ」

「すみませんでしたぁー」

こちらが笑って謝れば、ノエルも笑って許してくれる。
そんな暖かい空気に懐かしさを覚えながら、私は改めてノエルへと尋ねた。

「それで、もう今から飛行船のチケット取るところだけど、何か用事？」

きっとおみやげでも頼むつもりなんだろう。
その程度のことしか考えていなかったし、それ以外の用事が頭に思い浮かぶこともない。
しかし、ノエルから返ってきた答えは私の予想とは、はるかにかけ離れた物だった。

「ああ！　よかった。ギリギリだったんだね」

「え？」

心底ほっとしたような彼の声。ギリギリって、いったい何が？
相手からは見えもしないのに首を傾げて、私は不思議そうに聞き返す。

「実はお使いを頼もうと思って電話をしたんだ。間に合うか心配だったんだが、そうか…。いやはや、よかった」

「ちょ、ちょっと待ってよ。お使い？」

「そうだよ。チサトにはジャポンに向かってもらいたいんだ。なに、心配しなくてもジャポンにある国際空港は一つだけだからね。迎えも寄こすから迷うこともないだろう」

「いやそうじゃなくて」

「ジャポンに行きたかったんだろう？　丁度いいじゃないか。何でもいいからとにかくチケットを取って、取れたらまた僕に連絡をくれ。頼んだよ」

「ちょっ！　ノエっ……切れたし」

要件だけ言ってさっさと切るだなんて横暴だ。
そう不満に思って履歴から電話をかけ直すが、もう電話が繋がることはなかった。
忙しいノエルの事だから私に電話をかけるだけでも、様々な障害にぶつかってきたに違いない。
これ以上、彼に迷惑をかけるのも戸惑われて、私はしかたなくジャ

ポン行きのチケットを購入した。
到着時間などが分かったので、念のためとメールで詳細を転送しておく。
何かしら不都合があれば、ノエルの方から連絡があるだろう。

「ハンゾーは…ま、いっか」

このタイミングで観光案内頼むのも迷惑だし、お使いだからそう長期滞在できないもんね。

そんなこんなでジャポンの地に降り立った私。
純和風家屋ばかりが立ち並んでいるかと思いきや、割りと空港の周辺は近代的な日本の都市のような作りだった。
とは言え、さすがに東京ほど混雑した街ではないが。

携帯を開いてノエルからのメールを確認する。
お使いの内容はとある物を受け取ること。配達すればいいじゃん、と思ったがまあ何かしらの理由があるのだろう。
次に待ち合わせ場所、パチ公前という有名な犬の石像の前らしいのだが…。
一瞬、ハチ公前と読み間違えた。多分パチモノのパチだろう。なんとなく低俗な名前だ。

「はぁ…まだかなあ」

携帯を閉じてため息を吐くと、私はズルズルと滑り落ちるようにベンチにもたれこんだ。

日本の都会に比べれば随分とましではあるが、こんな雑踏の中で待たされるのはかなり久々のことである。
まだ十分そこらであるにも関わらず、この疲労…。って、いや、人混みはハンター試験の時もそうだったか。
でもあの人混みと、この普通の人混みを比べるのもどうなんだろう。

「おい！　チサト！」

「へ？」

いきなり自分の名前を呼ばれたことにびっくりしながらも、私は瞬時に姿勢を正した。
その上で声の主を確認することも忘れない。
…というか、今、日本に居て私の名前を知ってる人間なんて一人しか居ないんだけど。

「嘘っ！　ハンゾー！？」

「久しぶり…って程でもねーな。まさかハンター試験が終わって早々に会うことになろうとは…」

「ほんとによ…。まさかあんたが迎え？」

「まあな、取り敢えず歩きながら話そうぜ」

そう言ってハンゾーが歩き出したので、私もそれに続いて歩き出した。
しかし…こいつ相変わらず忍者っぽい服着てるんだな。そんな事を思いながらウロウロと視線を彷徨わせる。
前を歩くハンゾーの服装は、防具などが付いていない分ラフではあ

るのだが、試験の時に着ていた服とあまり変わりはない様に見えた。かと言って、私だって試験の最中に着回してた服のままなんだけど。

「ハンゾーは知ってるの？　私が師匠にお使い頼まれたこととか」

「少しだけな。どうもお前の師匠と俺の師匠が知り合いだったらしい」

「うわー、世間って狭いわねー」

「お前の師匠が手広くやり過ぎなんだよ。普通の医者はわざわざこんな極東の島国まで、とある病気に効くらしい鹿の角の研究のためだけにこねーって」

「……最近よく思うよ。私の師匠は一体何者なんだろう、って」

というか、まず医者は薬は専門じゃないから。研究しないから。ノエルってどうもマッドサイエンティストの気があるみたいなんだよね…。

私の前ではそういう話はしないし、少なくとも勤めてる病院では普通に医者として働いてるらしいから良いんだけどさ。

いつか恐ろしい物を作りだしそうで正直不安だよ。「不老不死こそ人類の帰結！　永遠こそ美の象徴なのだ！」とか言い出さないよね。

「ってそうだ。そういえば今から行く場所ってどんな所なの？」

「あー…かなり深い森の奥にある隠れ里だ。今は街中だから控えてるが、人目のない場所まで行ったら走るぞ」

「ほう、いいわね。忍者って感じ」

「お前は忍者をなんだと思ってるんだ」

「人里から離れた場所に居を構えて、ひっそりと暮らす戦闘部族的な」

「…間違ってはないけどよ」

お前に言われるとなんか癪だ。

そう続けられた言葉にこちらこそイラッときた私は、その苛立ちをハンゾーの両膝裏にぶつけることにした。

街中を抜けて二十分ほど走ると、ハンゾーの言った通り素人目に見てもかなり深い森に入った。

富士の樹海並に入り組んだ森なのだが、よく見ると一応道らしき物はあるらしい。

しかしこんな物、現地の人間でも見分けるのは厳しいだろう獣道とも言えない様な道だ。

走っている間は「未熟な子供が迷ったら大変なんじゃないか」なんて事を考えていた。

…まさか、その時は私が迷子になるものとは思っていなかったけれど。

ふと気づくとハンゾーが居ない。本当にほんの少し目を離した隙の

ことだった。
慌てて足を止めて立ち止まり、辺りを見渡して気配を探る。
もし道が分かるのなら動きようもあるが、先導する人間が居なくなると途端に道は消え去ってしまった。

どうしたもんか、と頭をひねる。
非常食は余っているから簡単には死なないが…。しかし、我ながら神経の図太いことだ。
ハンター試験で鍛えあげられたことにより、もうサバイバルを苦に思うことはなくなっていた。
いや、今は万全の体制が整っているから、ってだけなんだけど。

「のろし…は火事になるよねえ」

山火事なんかになったら、と思うと火をおこすのは躊躇われた。
ゼビル島なんかは本当に小さな島だったし、あちこちに水辺があったから火事も気にせずにやっていたが…。

結局どうすることも出来ず、私は木の幹に背を預けて助けを待つことにした。
…ここで、木の枝にでも登っていたらまだ良かったのだろう。
機内で寝過ぎたのが原因なのかは分からないが、不思議と眠たくなってほとんど眠っているような状態だったのだ。
周りを狼に囲まれていることなんて、ちっとも気づかずに。

「ァオォォオオン！！」

「うひゃあっ！？」

雄叫びで目を覚ました私の眼前に、狼の鋭い牙が迫る。
寝起きでびっくりして正直戦闘どころじゃなかったけど、何とか首筋に噛み付かれることは回避した。
バッと飛び退いて慌てて現状を把握しようとする。どうにも私はかなり不利な状況に追い込まれているらしい。
ニホンオオカミ…じゃないよなあ。絶滅うんぬんじゃなくて、見るからに普通の狼のサイズじゃないし。
これ、そうだあれだ。もの〇け姫に出てくる真っ白な狼に似てるわ…。

「えーっと、なに。もしかして縄張り荒らされたとか思ってる？　違うのよ、ちょっと迷い込んじゃっただけで、」

「ガルルルル…」

「あ、あはは、平和的に行きましょうよ。あんた達だって竹刀で殴り殺されたかないでしょ」

「グルル…ガァアウッ！！！」

「ちょ…っと、あーもう！　知らないからね！」

交渉失敗。しかたなく私は背中に担がれた竹刀を抜き、それに念を纏わせた。

「え？　なんなの。膝カックンが悪かったの？　私が悪いの？　でも膝カックンされて地面に崩れ落ちるハンゾーの方がどうかと思う

んだけど。え？」

そして冒頭に至るわけだ。
狼の死体（多分一部はまだ生きてる）に囲まれて、私はハンゾーに対し激しい苛立ちを募らせていた。
こんなどことも知れない樹海の中に、女を一人置いていく奴があるか。
というかまだ救助は来ないわけ！？　もうとっくに一時間は経ってるぞ！
火事にするわけにはいかないから、と最初はするつもりは無かったのだが、こうなったらのろしも止む終えないかも知れない。
そう思って、バッグの中からメタルマッチを取り出そうとした時だ。

「ッ！」

周囲に複数の人間の気配…！
それもかなりの手練で、今の今まで気配を完璧に殺していた人間！
明らかに敵意を持っているとしか思えないその行動に、私は目を見開いて驚いた。
咄嗟に警戒態勢に入るが、ここまで近づかれていては最早意味を成していないだろう。
しかしそれでも逃走の機会は伺わねばならない。
腕の一本や二本を失うことを覚悟しながらも、私はジリッと土を踏みつけ足にオーラを集中させた。

「お待ちくだされ、我らは貴殿と争いに来たのではありませぬ」

そう言って木々の間からフラリと現れたのは、白い髭をたくわえた老人だった。
だがそんな言葉を信用できるわけもあるまい。

私は老人を睨めつけながら言う。

「悪いけど私、今すっごい気が立ってるの。気配殺して背後に立たれたら、ゴルゴ13並に切れる自信あるから」

「…それは申し訳ないことを致しました」

私の渾身のボケはスルーか。

「貴殿がノエル殿の使いであることは我らも承知しております」

「…どういうこと。あんた達、自分のしてる行動がどれだけ怪しいか分かってるの？」

「無論。しかしいくらノエル殿の使いとは言え、この里に信用に足らぬ者を招き入れる訳にはいかぬのです。何卒ご容赦を…」

「ふーん、で、私はどうだったわけ？」

さっきの狼、試験の一環だったのかよ…。何でハンター試験が終わってすぐ、また試験なんか受けなきゃいけないんだ。

呆れた表情で狼達の死体を見やる。念獣ではなかったから、訓練用に手懐けられてた狼だったのかな。

まあ確かに、やたらと統率の取れた狼だとは思ったけど。

と、私がそんなことを考えているのが分かったのか分かっていないのか。

狼に向けていた視線を老人に戻した私の目を、まるで品定めをするかのようにジットリと睨めつけて。

…数十秒ほど硬直が続いた後、老人は漸く口を開いた。

「…さすがノエル殿の弟子。我らから申し上げることは何も御座いませぬ」

「そう、良かった」

本当にそう思ってんのかね。だから日本人って嫌いなんだ私。
あのお喋りの男が存外に私の好きなタイプの人間だったことを思い知って、友人は大切にせねばと心に誓った私だった。

その十三（後書き）

ハンゾーがやたらでしゃばってますが、ぶっちゃけ今だけです。

その十四（前書き）

最近、原作で一応１００番が登場していた事を知りましたが、特に支障はなさそうなのでスルーします。

その十四

「っつーわけなんだよ、悪いな。でも不可抗力だったんだぜ」

「うふふ、いいのよ。だってハンゾーの意志で置いていったわけじゃないんだものねえ？」

「…なんか引っかかる言い方だな」

そりゃ引っかかる言い方にもなるだろう。

私はニッコリとした笑みを顔面に貼りつけながら、内心ではそんなことを思った。

なにせ、友人だと思っていた人間の手によって、命の危機に晒されることになったのだから。

それも一般人だったら確実に死ぬ様な所業だ。普通は怒るどころじゃ済まない。

しかし、ハンゾーは「上に命令されたことなんですごめんなさい」とちゃんと謝罪しているので、その謝罪を無視するのはもうすぐ成人する私にとってはアウトな行為。

相手がごめんなさいしたのなら、納得できなくても一応納得をした振りをするのがマナーです。

…ってノエルが言ってた。

「本当にいいのよこれで。終わり良ければ全て良し、でしょ？」

「俺はお前の切れどころが分からんぜ。なんでこれを許して、”普通じゃない”って言っただけで切れるんだよ」

「じゃあ、女心と秋の空で」

「だからなんで、そこで”じゃあ”なんだ！」

細かいことでうるさい男だな。ハゲ…てるね、うん。
ともかく、これ以上ハンゾーの不満に付きやってやる義理も無いので、私は「はいはい」と適当な返事を返した。
と、ハンゾー。そんなやる気の無い私にも気づかず、べらべらとどうでもいい事を喋りだす。
それも、よくよく聞いていると、話している内容はすべてハンゾー自身のことであり、結局私のことはお喋りのきっかけにしかなっていないのだ。
典型的なお喋り女の特徴である。こう言うのは聞き流すに限るよね。

そうしてハンゾーの話を右耳から左耳へと受け流しつつ、まったく別のことを考えるという高等技術を使用することにした私。
の手元にはとある品物についてまとめられた資料がある。
製本技術や紙の劣化具合からして、かなり昔に執筆されたであろうそれ。
はたして私なんかがこんな貴重っぽい本を素手で触ってもいいのだろうか、なんて事を考えながらページをめくった。
…妖刀”村正”と記されている。……どうやらノエルはこれを持ち帰ってきて欲しいらしい。
お、おおおおオカルト？　いや私は別にそんな幽霊とか信じてねーし！
火の玉とかあれ全部プラズマで説明できるんでしょ？　知ってるから、知ってるからーっ！！

…おほん。冗談はさて置き。

「ねえハンゾー。もうそれはいいから、村正について教えてよ」
「ん？　あ、ああ、つっても俺もよく知らねーんだが…」
「見たこともないの？」
「いや、見たことはあるぜ。厳重に保管されてるから触れはしねえが、刀に宿る荒神だかなんだかに供物を捧げる儀式のときに見た覚えがある」
「供物って…要はイケニエ？」
「人間じゃねーけどな。ほら、この項に記述してあるだろう」
そう言ってハンゾーが指さした部分を見ると、確かにイケニエの贄などの文字を解読することができた。
確かに私はこの世界の文字よりも日本語の方が断然得意だが、筆で綴られた古い文字と言うのは中々難解だ。
…うーん、てっきり村正は何らかの念を帯びた刀だと思ったんだけどなあ。
そんな刀に贄とか必要なんだろうか。もしかしてオーラの補給作業とか？
「はぁ…師匠もこんな面倒な修行なんかさせなくてもいいのになあ」
「修行？　使いじゃなかったのか」
「いや、多分修行だと思う。妖刀の秘密を明かさない限り帰ってく

るな！　っていう」

「妖刀の秘密って…。それが分からないから妖刀なんだろ？　大体、忍者でもないのに諜報の修行って変な師匠だな」

「あー、うん、まあそうね。変な師匠よ」

そうか、まだハンゾーは念のことを知らないのか。

危うく自分が機密情報を漏らす所だったことに気がついて、私はサッと顔色を青くさせた。

ノエルから耳にたこが出来るほどしつこく注意されていたのだ。念を一般人に教えることは禁忌である、と。

特にプロハンターに教えることは絶対にダメらしい。当然私は「プロハンターは一般人じゃないだろう」と疑問に思ったのだが、どうもハンター試験には裏試験というものがあるらしく、その為にハンターに念の情報を与えることは絶対にしてはいけない事なのだそうだ。

つまり、念を覚えない限りはプロハンターだろうと、アマチュアハンターを大差はないということだな。

…こんな設定なんか漫画にあったっけ？　まあ、主人公が念を覚えないなんてこともありえないし、あるんだろうなあ。

「とにかく、実物を見ないことには始まらないわ。どうにかして見せてもらえない？」

実物を見せろ。

という私のわがままなお願いにハンゾーは渋った。当然だ、むしろ私だったら切れる。
そんな無理な願いを聞いてもらおうというのだから、私はその分だけ、いやそれ以上の恩を返すことを約束した。
肉体労働だろうと単純作業だろうと何でもしますぜ、と。
ハンゾーは私が竹刀でホテルの壁に大穴を空けたことを知っているので、女が力仕事だなんてという疑問はまったく抱かなかった様だ。
そして私は彼のおかげで妖刀を管理している、というおっさんに会うことが出来たのだが…。

「なんでも？　…ほうかほうか、じゃったら早速今日の夜にでも閨に　ぉうふっ！？」

セクハラ、ダメ絶対。
一人のセクハラ親父が重傷を負ったことによって、私は周囲から恐れられ、さらに一部からなぜか崇められる存在となってしまったが。
結果として妖刀をいつでも間近で見ることが出来る事になったので、これこそ終わり良ければ全て良しって奴だろう。

で、実物を見た私の肝心な感想なのだが。

「あーあれは妖刀だわ。間違いない。うん妖刀妖刀、妖刀怖いわー、超怖いわー」

「せめてウソでも良いから、キャーッとか女らしい悲鳴あげようぜ」

案の定、妖刀（笑）はオーラを帯びていたので、私の妖刀に対する

興味はいっきに薄れてしまいましたとさ。
もっと禍々しいオーラとかだったらまだ良かったかもしれないけど、ヒソカという禍々しさが服を着て歩いている様な人間を見ている私にとっちゃ、あんなの序の口の序の口である。
下手なオカルトなんかよりヒソカの方が百倍怖いよ。うん。

とは言え、まったく参考にならなかった訳ではない。
刀自体は実際に名工が作った歴史ある名刀であるし、初めて”神字”という念が込められた特殊な文字を見ることが出来たからだ。
紙面上ではどういうものか読んだことはあるのだが…、そんな大層な物は私には無縁な物だと思ってたし。
いや、だって神字ってパソコンで言うプログラミング言語みたいな役割してるみたいなんだよね。
ハンター文字の習得にでさえ苦労した私が？　神字なんか扱えるとでも？
自身を持って断言しよう。絶対に無理です！

「まあ何にせよ、これも良い経験よね。期限も無いみたいだし観光してから帰ろっと」

「観光ってお前、誰が案内するんだよ」

「もちろんハンゾー…とは言わないわよ。誰か暇な子でも居ない？
どうせだったら同年代の女の子がいいなあ」

「……」

「…えっと、もしかして…ダメだった？」

ちょ、そんな複雑そうな表情して黙り込まないでよ。

まさか野蛮な私を同年代の女の子に近づけたら、女の子が妙な影響を受けてしまうとでも…。
し、失礼な！

「…いや、さすがにそれはない…が。まあほら、俺が案内するから、な？」

「う、うん…それは有り難いんだけど…」

なんだろう、私ここで何か悪いことしたっけ。
ハンゾーの否定の言葉なんて、これっぽっちも信じていない私は、ジャポンに来てからの記憶を引っ張り出して考えた。
真っ先に思い当たるのはやはりセクハラ親父の急所を蹴り上げたという、男からしてみれば非道極まりない所業だが、ハンゾーがお喋りであることを考えると、ハンター試験の最中の出来事も原因になっているかもしれない。

たとえば…ヒソカ…。

…いっ、いやいや！　ここの人はノエルと知り合いみたいだし、まさかそれだけで危険分子扱いにならないよね？
もしそうだったら私はもう、まともに生きていくことさえ出来なくなるのだが。
恐る恐るハンゾーの様子を伺う、が忍者の思考が読めるはずもなく。

「あのさ、私。ちゃんと相手は選んでいじめてるからね？」

「おまっ…！　チサトてめぇどういうことだそりゃ！！」

「言い方は悪かったと思うけど、真面目な話、弱い者いじめはしな

いよってこと」

つまり愛のあるいじめ？　的な？
あはっ、とごまかす様に笑うが、石のように固まってしまったハンゾーはそれでも動く気配はなく。
そんなにツッコミどころのあること言ったか…？
私はそう不安に思いながら、とにかく話題を逸らそうと普段より幾分か饒舌になった。

「ノエルの話も聞きたいし、パンフレットはいっぱい欲しいよねぇ。ね、観光案内所とかあるの？」

「…あ、ああ、空港内にも確かあったと思うが」

「そっかー、でもまたあの森を通るんだよね。嫌だなぁ」

「安心しろ。さすがにもう置いていかねーから」

「当たり前よ！　もし置いてったらあのセクハラ親父と同じ目にあわせてやるから」

「うっ…！？」

知ってる？　金的って護身術としては立派な技の一つらしいわよ。
そんなことを言おうものなら、「お前に護身術は必要ない！」と突っ込まれそうではあるが、一度怖い目にあっている私としては割りと冗談でもなかったりする。
元々は海外旅行なんてしたことないから、日本に住んでいる間は、治安の悪い場所の恐ろしさなんてさっぱり分かっていなかった。
だからこちらに来てからは、日本って本当に安全な国だったんだ。

と身に染みて感じているのだ。
日が落ちてからも平気で外を出歩ける国なんて、まず存在しないのだと。

「つーか、妖刀については調べなくていいのか？　修行なんだろ」

「いいのいいの。もう大体は分かったから」

「はぁっ！？　分かった！？」

「うん。だから早く観光したいって言ってんの」

「えー…」

呆れた様子で声をあげるハンゾーを無視して、私は座布団から立ち上がる。
ノエルの意図はよく分からないが、表向きは「お使い」としか言われていないのだから、分からなかった振りでもすればいいさ。

そんな事より観光だ！
寿司だ、醤油だ、味噌だ、米だーっ！！

「金はある、後は買える店があるかどうかよ！」

「…それ、師匠のクレジットカードとか言ってなかったか」

「いや、最悪ハンター証で無利子で借金できるし」

「……」

その十四（後書き）

実は、未だにチサトの念能力で迷ってます。
妖刀村正は確定として、それ以外に「時間制限付きで身体能力を強化する能力」とか「オーラを込めた塗り薬で傷を修復する能力」とか考えてるんですが…。
…一番の問題はネーミングセンスなんですよね。ええ。
既存の漫画などを参考にしようとしてみたんですが、強化系で刀系の都合のいい能力が分からなくって。
いや、別に強化系である必要はないんですけど。

【ネタバレ注意】妖刀村正について（前書き）

今後主人公が入手する武器についての設定です。
まだ仮に設定されている段階ですので、アドバイスなど感想の方から頂けると嬉しいです。

【ネタバレ注意】妖刀村正について

【妖刀村正】
村正という名工が打った刀であるが、使用者の魂を吸い取り死に追いやるとされることから妖刀という扱いになっている。
しかし、魂を吸い取る代わりに強靭な肉体を与えるため、戦や争いで幾度と無く利用されてきたそうだ。
刀身と鞘に独特の紋様が刻まれており（神字）、その紋様が呪詛その物である、だとか呪いを封印しているもの、だとか噂されている。
今現在はとある忍者一族の元で管理されている。

【念具としての村正】
念能力者としてその界隈では有名だった村正が生涯をかけて打った名刀。
長い年月をかけて丹念に掘られた神字と、村正自身が込めた念により使用者へと力を与える。
妖刀自体はアンプのような役割をしてしており、使用者の念を無差別に吸い取ってそれを増強、使用者の体全体にオーラの鎧をはることで還元するという機能。
もちろん、念を覚えていない一般人や、基礎がなっていないなんちゃって念能力者が使えば死に至る。

妖刀を持つことで与えられるという強靭な肉体は、鎧によって纏に近い状態になる事で得られる副次効果。
本当は防御に特化した能力であり、刀自体は念を纏っただけの普通の名刀である。

【具体的な効果】
・使用者の念を吸い取り、それを鎧として還元する。
・オートで流をしてくれる。使用者の意識は関係ない。
・鞘におさめることにより、電源をオフ状態にできる。

【誓約と制約】
・使用者の意志に関係なく念を吸い取る。その結果死のうがお構いなし。
・定期的にメンテナンスをする必要がある。刃こぼれなどとは関係なく、一定の条件をクリアしていないとメンテナンスとは認識されない。

【備考】
・使用者が寝ている時でも、わざと鞘におさめず抱え込んでいれば、いかなる攻撃にも対応できる。ただし疲れる。
・使用者の念を吸い取るという効果から、相手から何らかの物をドレインするというイメージがしやすい。（新能力開発？）
・鎧の硬度も刀の方で勝手に調整してくれる。筋肉バカでも扱いやすい！

その十五

ほくほく顔。今の私の表情はまさにそう表現できるに違いない。
一週間かけて観光しつくしたからね。ハンゾーが「いい加減にしろ！　マジで北海道から沖縄まで観光するつもりかお前！」って切れるまで観光したからね。
…言えない、本気で最北端から最南端まで行くつもりだったなんて。

「お土産も全部航空便で送ったし、もうそろそろ妖刀を持ってヨークシンに帰ろうと思うんだよね」

「…そういやそうだったな。てっきり観光目的で来てるもんだと」

「えへ」

元々観光しに来る予定だったし強ち間違いでもないんだけど、ここはもう笑ってごまかしとけ。
と適当に笑ってみるが、私でさえ胡散臭い笑みだと自覚しているのだから、ハンゾーからしてみれば挑発されているようにしか思えないだろう。
しかしハンゾーもいい加減に私の楽観的すぎる性格には気づいているらしい。
ムッとした表情こそするものの、それを口に出すことはなく「もう十分楽しんだだろう」と父親の様なことを言った。
ちなみに、私はもう数ヶ月で二十になるのだが…。ハンゾーは同じく数カ月で十八になるそうである。
彼の風格は一体どこから出ているのだろうか、もしかして頭？

「まあねー。それでもまた観光しに来る気満々だけど」
「おう、勝手にしろ。んで長老が、話があるからお前の気が済んだら連れてこいってよ」
「へ？　…え、何、待たせてた？」
「それはもう。っつーか待たせるも何も俺を連れ回ｓ「分かった！長老様のとこ行ってくるね！」
ハンゾーが何か言いかけてた気がするけどしーらね！
後ろから怒鳴り声が聞こえてくる気がするけど、それもしーらねっ！

そんなこんなで私は長老の元へ向かい、作法なんて物はまったく知らないので、面接のマナーを思い出しながらの入室となった。
いや…就職時の面接は結局出来なかったんだけどさ。
なんてちょっと現代の日本を懐かしみつつ、座布団の上に腰を下ろしたの、だが。

「…最近、こういうパターン多くない？」

そこ、メタ発言とか言わない。
というか、え、いや、本当になんで私は今天空闘技場とやらの列に並んでるの？
飛行船に乗った覚えもなければ、チケットだって買ってないのに！

あの狸爺はなんと言っていたんだったか…。確か、「試練」がどうのこうのとか。

「うひっ」

突然、ポケットから伝わってきた振動に驚いて、なんだか妙な悲鳴を上げてしまった。

そういや最近は驚かされることも多いな、主にヒソカとか。

「色気がない」とかいうイラッと来る感想を思い出しながら、上着のポケットに手を突っ込んで携帯を手に取る。

ディスプレイに写ったのはメールの着信を知らせるマークだった。

「……ちょっと勘弁してくださいよノエルさん…！」

メール内容の要約。「あの妖刀は君にあげるから、その代わりに天空闘技場でお金を稼いでおいで。クレジットカードの件、分かってるよね？」

怒ってらっしゃるの？　私が湯水のごとく（庶民の金銭感覚の範囲で）金を使ったことに怒ってらっしゃるの？

でも、でもでも金借りようとしたらハンゾーがダメって言うから。

……か、返さなきゃ！　これじゃあ家に帰ってもご飯作ってくれない！

「うううう、許してノエルぅ」

けど…早く帰ってノエルが焼いたパンが食べたいなあ。

そう思ったらすぐにお腹が空いてきて、私のお腹はぐぅと小さく音を立てた。

受付嬢の前で。

「うっ…は、はい、ありがとうございます。それでは中へどうぞ」
お姉さん、目は笑ってるし声はふるえてます。営業スマイル出来てないです。
しかしお姉さんの失礼な反応に文句を言うことはできない。
…我ながらこれで格闘技経験十五年って信憑性無いよなあ。でも本当なんだからしょうがないだろう。
正確に言うと剣道は格闘技とは違うと思うのだけれど、この何でもありな世界で言えば大差は無いと思う。
多分、格闘技の定義は武器を使用しない武術だと思うけど、まあ大丈夫大丈夫。

「うげーっ、野蛮」

視界いっぱいに映るリングと観覧席を見て、私は思わずそんな声を上げた。
ハンター試験である程度は慣れたし、覚悟だって十分にしていたつもりなのだが…。
敷居が低いからなのか、そこには試験とは比べ物にならないほど野蛮で低俗な世界が広がっていたのだ。

「お嬢ちゃん、来るとこ間違えたんじゃないかい？　お兄さんが街まで送ってやろうか」

「うるさい、ほっといて」

「なに…うぐっ！？」

そして案の定、中に入った途端に妙な輩に絡まれてしまった。

いや、外で列に並んでる最中にもうっとうしいのが居たのだけど、順番が変わることは無いからただ一睨みするだけで良かったのだ。しかしこう人が多い場所では、一度や二度大男を痛い目にあわせただけでは何も変わらないだろう。
試合で何度か勝てば絡まれることもなくなるだろうか。そう思いながら体からオーラを放出して「私は強いですよ」アピールをする。もしかしたらヒソカみたいなのが釣れてしまうかもしれないが…。コバエが大量に群がってくるよりはマシだろう。多分。

「１２５６番の方、１３１２番の方、Ｇのリングへどうぞ」

「おっ、呼ばれた」

周囲がやかましい中で審判の声を聞き分けるのは大変だ。剣道大会の時でもざわめき立つときや、たまに野次が飛ぶときもあるが、だからと言ってここまでではない。
まさか国会で飛び交う野次が可愛らしいと思える日が来るとは思わなかった。
…まあ、この野蛮人共が静かになるぐらいの事はしてやろうじゃないか。

「おじさん、ごめんね？　これ限りにするつもりだから」

「はぁ？　何を…」

相手が言い切る前に私は右手でデコピンの体勢を作る。
顔をしかめ怪訝そうな表情を作る対戦相手だが、審判だけは驚いた様子で私を見つめていた。
さすがに観覧席でオーラ放ってる様子までは見てないか。

「いぐぎ」

声にならない悲鳴を上げて、ピュンと勢い良く飛んでいく対戦相手。
人差し指にオーラを込めるという、まともな修行をしていればそう難しくはない芸当だ。
しかし実はこれが中々難しかったりする。何故って、今の私には「対戦相手を殺してはならない」というルールが付き纏っているから。
変に力が入ってしまうと首の骨が折れてしまうし、力が弱ければインパクトが無くなってしまうという。
パフォーマンスでやってるのにインパクトが無きゃ意味ないよねえ。

「…素晴らしい。ここへは何の目的で？」

「師匠に放り込まれました。目を養って来いとのことです」

「そうか、いい経験になるだろう。君には１００階への入階を許可します」

「ありがとうございます」

金稼ぎに来ましたなんて言えないし、一応メールにはそんなことも書いてあったしな。

審判から入階許可の紙切れを受け取ると、私は他の人間には目もくれずエレベーターへと向かった。
１００階まで行けばそれなりに選手の質も良くなるだろう。
ん？　というか、念能力者が出てくるのって１００階からじゃなかったっけ？
ゴンやキルアがここで念を覚えるのは知ってるんだけどなあ。

エレベーターの中でスタッフから説明を受けるが、その中で念能力に触れることはなかった。
まだ一般人が多い１階だから当然と言えば当然のことか。それにまったくの収穫が無かった訳ではない。
スタッフ曰く、「２００階までは１０階単位でクラス分けされている」そうなのだ。
もしかして念能力は２００階からなのだろうか？

「はい！　こちらが先ほどのファイトマネーです。それから、こちらは天空闘技場におけるルールの資料となっておりますので、ご一読ください」

「ありがとうございます」

百五十二円…ではなく、こちらの通貨であるジェニーで支給されるファイトマネー。
それと一緒に出てきたのは、Ａ４サイズの極普通のプリント用紙だった。
はて、ここにそんな細かなルールなど存在するのだろうか。
てっきり武器使用禁止や殺人禁止（当たり前だけど）程度のルールしか無いものと思っていた私は、不思議に思いつつも自販機でジュースを購入し、ベンチに腰をおろしてからプリントに視線を落とした。

…念能力の使用規定。

簡単に言うと、常人には理解出来ない範囲の念能力の使用は控えて下さいとの事だそうだ。
となると凝とか硬までではセーフなのかな、いや、まだろくに硬もできないけど。

それから天空闘技場としては念を使用せずに肉体のみで勝利してほしいことと、この資料は貰った窓口に返却することなどが記されていた。
心配せずとも念は２００階までは使わないつもりだ。どうせ使わずとも、ノエルとの修行であり得ない身体能力になってるし…。
今の私なら絶対にオリンピックの全競技で金メダル取れるよ。
もう帰れないって分かってるし、ノエルに恩返しできるまでは帰るつもりも無いけど。

「さーて、がんばりますかね」

ところでゴンとキルアが天空闘技場来るのって、ハンター試験が終わってすぐじゃなかったっけ？

その十五（後書き）

チサトは移動系の能力で天空闘技場までやって来ました。
そしてチサトさん、キルアに起きたシリアス展開をすっかり忘れてます。なんと薄情な。

あ、村正は２００階までおあずけです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1051y/

おかしな世界で

2011年11月23日20時54分発行